八幡が小学生に！？

もみ～じ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

雪ノ下陽乃に無理矢理飲まされた怪しい薬。実は肉体年齢を下げる効果があるらしい。それを飲まされた比企谷八幡。比企谷八幡はある異変に気づく。奉仕部の雪ノ下雪乃と由比ヶ浜結衣、生徒会長の一色いろはの様子が変だ。助けて！小町！助けて！戸塚！材木座は来なくていいよ！

薬の効果は１ヶ月、この１ヶ月どう過ごすのか…

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 12
第3話 …… 20
第4話 …… 28
5話 …… 35
6話 …… 41
7話 …… 49
8話 …… 58
9話 …… 66
（続編）雪ノ下編 …… 78
（続編）由比ヶ浜編 …… 89
（続編）一色編 …… 101

第1話

「比企谷くんひゃっはろー！」
「なんですか…」
「あれー？なんか冷たくない？」
いや…だって帰ってきたら俺の部屋にいるんだよ？小町いないよ？どうしたの？不法侵入？
「なんでいるんですか？」
「小町ちゃんに合鍵貰っちゃった♡」
可愛いからめちゃくちゃ悔しい。勝てるわけがないよ。
「で…その右手に持ってる薬？はなんですか？」
「ん～？これはね～1ヶ月可愛くなる薬！」
何それ怪しい。てか何「可愛くなる薬」って今考えたでしょ。可愛いから許す。
「というわけで！エイ！」
「ちょっ…」グビ
雪ノ下さんに無理矢理飲まされた謎の薬。某名探偵みたいになっちゃうなこれ。明日金曜日なんですけど…学校あるんですが。休めるのか？
「なんか…意識が…」パタン
～～～～～～～
「お兄ちゃん～朝だけ…ど？」
「うーん…ここは？」
小町は思いました。これは夢であると…ほっぺをつねればきっと目が覚めます。
「ん？よく見たら置き手紙が…なになに？」
「小町ちゃん！ごめんね！薬無理矢理飲ませたら縮んだ！陽乃」
「・・・陽乃さんナイス」
……
俺は昨日のことをすべて話した。
「というわけなんですよね…」

「うむ、陽乃がなぁ…やりそうだと思ってはいたが…それにしても本当に比企谷か？」
　ただいま…平塚先生とミニ会議中。どうやら変化したのは外見だけらしい。良かった…無邪気な俺じゃなくて…いや無邪気じゃなかったな。
「いやいや…生徒の顔を忘れたんですか」
「いやだから変わってるから聞いてるのだよ」
「そうでしたね。変わってましたね。泣いてもいいですか？」
　泣きたい。なんで行かなきゃ行けないんだよ！小町ィ。
「うむ…とりあえずそのまま教室に行かれるのも困るしな」
「困る困らない以前に行きたくないです」
　今の身体で行ったら色々と死にたくなっちゃうぅ
「うむ…とりあえずここにいろ。雪ノ下達には私から伝えておく。ところでなんか飲むか？」
「えぇじゃあいただきます」
「オレンジジュースでいいか？」
「怒っていいですか？」
「(・・ω・、)」
　だらだらと読書をしているといつの間にか放課後になっていた。
「そろそろ行くかぁ」
　周りに誰もいないというのを確認しながら部室へ向かう。こういう時にステルスヒッキーを発動できるはずなんだがこの姿が妙に目立つんだよなぁ…
　弱ステルスヒッキーのおかげで何とか部室まで着いた。
「(なんかすげぇ緊張するんだが)」
　ガラガラ
「あっー・せんぱ…い？」
「一色」
「ん？僕〜？迷子かなぁ？」
「いや…俺だ」
「俺、じゃ分からないよぉ？」

多分気づいてるだろ…俺の目とか俺の目。それしかない!?嘘でしょ?俺ってそんなに目が腐ってるの?そんなぁ
「ほんとに小さくなってますね」
「だろ?」
「ちょっと可愛いですね」
「ッ!?」
何この子なんか素が出てるよ?照れるんですけどやめてよね!
「ばっか…俺の目を見て言えるのかそれ」
「めちゃめちゃ言えますよ!」ハァハァ
なんでハァハァしてんの?怖いんですけど…
「ちょっと抱きついてもいいですか?いいですね」ダキッ
ちょっと一色さん?当たってます当たってますよォ?
「当ててるんです。あ~抱き心地が良すぎます!」
俺は理解が出来なかった、当ててる?え?ただいまどゆこと状態だ。脅しの材料調達ってか?怖ぇよ雪ノ下とかに見られたら「幼くなったからってなんでも許してもらえるとは思わないでくれるかしら?エロ谷君。」
って言いながらスマホを片手にもしもしポリスメンって…
「一色…やめて……くれ」
あれ?なんで涙目になってるんだ?俺は…もしかしてこれも薬の効果ってことか?そういえば小町の小学生の頃よく泣いてたな。嫌がる時に自然と涙も出てた。やはり薬の効果だな。
「っ!!!!!／／／」
駄目だ。一色の顔がとろけてる。
「先輩…そんな顔されたらいじわるしたくなっちゃいますよぉ～」
「いや…やめてね?うんやめ…ん!?」
柔らかい感触が顔に…これは、あっ!
一色は正面から抱きついてきた。目の前が真っ暗になってしまった。そして息苦しい。
だが嫌ではない自分に驚きを隠せないでいた。もしかしてこいつ…俺のこと、いやありえない…俺がこんな姿になったからじゃ…だよ

なそうだよな。ぼっちである俺を好きな奴なんてな。
ガラガラ
「(あっこれ死んだ)」
俺は察した。雪ノ下達だ。さて、どう風に説明しますかね。
「一色…さん?何をしてるかしら?」
「いいいいいろはちゃん!!約束したでしょ!!!」

ん?ガハマさん何を約束したのかな?え?怖い怖い。帰りたい!帰らせろ!いや帰らせてくださいお願いします。
「えぇ~だってぇ~先輩から来たんですよぉ~それに抵抗してなかったしぃ~」
抵抗したんだよなぁ…一応。でも今の状態じゃ抵抗しても…振り解けないんですよね!もう可愛いなぁ!戸塚は!
「ぐぬぬ~ヒッキー!おいで!」
「は?」ガルルル
俺は犬じゃない。八幡の威嚇
「由比ヶ浜さん…こういう時はこれよ」
!!ＭＡＸコーヒー!!!
「あっマッ缶だ」テクテク
「あっ先輩」シュン
「マッ缶をくれ!雪ノ下!」
「雪乃」
「?」
今日1日1回も飲めなかったんだ。早く飲ませろって思いながら…マッ缶を奪い取ろうとしたが身長差が激しく…届かない。
「雪乃お姉ちゃんって呼んでくれたら…あげるわ」///
何照れてるんだこの人。だがマッ缶のため…プライドを捨てても呼ぶしかない。
「雪ノｓ…雪乃お姉ちゃん…マッ缶ちょーだい」
「はいどーぞ」///////
マッ缶はやっぱり美味いな!って違う今はそれどころじゃないん

だよ。
「ちょいとトイレ行ってくるわ」
今日はこんな姿になったから荷物は本とかくらいしか持ってきてない。つまり逃げれる。
「私も行くわ」
「私もー！」
「ちょっと私も行きますね～」

ちょ…着いてこないで！ヤメテッ！
……
結局逃げれなかった。あ～戸塚に会いてぇ…戸塚になら俺の人生あげちゃう。
「・・・」
助けて、囲まれている。逃げ道はない。小町ィ～電話はよ。
プルルルル
「悪いちと電話」
「あっ」
「（´・ω・`）」
「・・・シュン」
何この人達可愛いんですけど…
そして部室を出て応答する。
「もしもし」
「もしもしお兄ちゃん？」
「あぁ」
小町よ。できれば家にいてくれ。頼む。
「小町友達の家に泊まるから～ご飯は雪ノ下さん達と済ませといて～。お母さんたちも今日いないらしいし、お兄ちゃんは今その姿だから、誘拐されそうだし」
「小町ちゃん？小町ィ！」
「どしたの」
酷いよ！小町ィ！お兄ちゃん…いや今は弟？。まぁどっちでもい

いや。とにかく俺は悲しいぞ！今の雪ノ下達といたら…ゴクリ
ん？なんか視線を感じる。気の所為だ！木のせいだからな！全く自然環境には勝てないＺＥ！
「話は聞いたわよ！比企谷君！」
「メール来ました～！」
「小町ちゃん！ヒッキーのお世話は私たちに任せて！」

あっ詰んだわこれ（^^ｐ^^）
「比企谷君。ご飯が出来たわよ」
つーわけで…助けて戸塚。材木座は来なくていいです。
「へっクション!!!」
そして3人に囲まれてるから身動きが取れない。
「先輩♪」
「比企谷君」
「ヒッキー！」
「あ～ん♡」
さて…どうするか…よし決めた。
パクッ
うん美味い！美味いな！
「雪ノ下これうめぇｚ…」
「「むぅ～」」
やっぱり…駄目ですよね分かってました。
「じゃあこうしよう！3人でヒッキーに食べさせる感じで！」
おい2人とも頷くな。1人否定派がいるよ！あっでも肯定派と否定派…数では負けたな。
……
第1関門突破なう。
ただいま一色の膝の上に座っててて…抵抗するとガシッと掴まれ…抱きしめてきます。色々と当たってしまい…俺の理性は崩壊してしまいます。頑張れミニ八幡。起き上がらないでくれよ！ん？ミニ八幡って誰かって？察して…俺は紳士だから下ネタとかお下品な発言

等は一切致しません！

「えへへ～」ハァハァ

「随分機嫌良いな」

「だってぇ～先輩に抱きつけるんですも～ん」

いろはす可愛いなおい。これ素だろ？嬉しくなっちゃいますよ。

「むぅ」

「ヒキガヤクン」

なんか睨まれてるんだが…

「トイレ行ってくるわ」ヒョイ

「あっ」シュン

そんなシュンな顔しないでくれ。何故か知らんが罪悪感が…

「小町はなぜ俺を見捨てたんだよ」

……

「へっクション!!!」

「小町ちゃん風邪ひいちゃったの？」

「ううん…違う違う（噂話かな？多分お兄ちゃんだよなぁ）」

「（あの姿で一緒に過ごしてたら…私の理性が崩壊しちゃうよぉ…／／／）」

……

「いや無理だろ普通に考えて…」

「えぇ～いいじゃないですかぁ～今の先輩は小学生なんだしぃ」

「えぇ…小学生…だもの」／／／

「だよね…」／／／

もうヤダ帰りたい。ここ俺の家でした。

どうやったらここを上手く切り抜けられるんだろう。今残ってる糖分を全て犠牲にして、逃げようそうしよう。

「それとも比企谷君は私たちと入るのは嫌かしら？」

ウッ！それを聞かれるとどう答えればいいのかわからなくなるだろ！

ただ…今の俺は普段の俺ではない。

「いや」
さぁ！俺のメンタル？を全てを犠牲にして！
「「（言え！）」」
「き…気持ちは嬉しいし…嫌じゃ…ないけど、この状態でな？えっと…なんか色々進んでからの方が…な？」
「「ッ～／／／」」
成功でいいんだよな？あの黒歴史以上の黒歴史が誕生した瞬間である。雪ノ下さん許さん。許すけど…
「そ…それもそうですねぇ～」／／／
「えぇ…そうよね」／／／
「だ…だよね！」／／／

「はぁぁぁぁ」
湯船サイコゥ。
「まさか雪ノ下達がなぁ…俺がちびっ子になって理性崩壊するとは…」
それ以前に俺の事が好きってどういう事だ？
勘違いだよなきっと…
「ふぅさっぱりんごー」
「せんぱぁい～いや…八幡君！」
「は？」
「は…八幡君」／／／
「八幡君～！」
どゆこと…八幡ちょっとよく分からないよぉ。
「「今日誰と寝る？」」
「ひ？」
今日誰と寝るっとは…俺は俺の部屋、3人は小町の部屋。これで解決。
「私は八幡君と寝たいですぅ～」
「わ…私もよ！」
「あたしだって！」

ソローリソローリ
こういう時はソロリ作戦に限る。ステルスヒッキーの上位互換…
「疾走のステルスヒッキーΩ」
「「どこ行くの？」」
えっやだ怖い。お姉ちゃん達怖いよぅ。
……
翌朝
なんか…姉3人　弟1人みたいな構図になってる。助けて戸塚。
放課後部室にて…俺は知っている人にバレることになる。
ガラガラ
「はちまーんッ!!」
「こ、こんにちは」
これはこれは戸塚様ほか1名。
「おや？八幡はどこだ!?」
「あ～ヒッキーはね」
「この子ですよ」
「ん？」
「え？」
「うす」

「「えぇ～!?」」
俺は2人に薬の件について説明した。
「まさかそんな話があるとは…」ｏｒｚ
いやなんでお前がｏｒｚするんだよ。
「もし我が小学生になったらもｔ…」
ハイハイノーコメントノーコメ。
こいつの話はどうでもいいんだよ！それよりも戸塚が大事！
「八幡…」
「おう…」
さぁ…俺はどんな言葉でも受け止める覚悟はできた。
「か…可愛い！」

「エンダァァァイヤァァァ」（喜びの舞）
やはり戸塚！戸塚は世界を平和にする。全人類の課題である、世界平和に必要不可欠な存在である！
「ヒッキー喜びすぎ！」
「そうですよ！私たちみたいな可愛い女の子がいるって言うのに！」
「私たちだけじゃ不満かしら？」ウルウル
グッ！俺はこいつらにも弱いって言うか甘いのか？
「いや…不満なわけ、ねぇよ…そのなんだ？俺みたいな奴にそこまでされちゃあ…満足しないわけねぇしな。勘違いすんじゃねぇぞ！」
俺って実はツンデレキャラなんかな…捻デレとは言われるが…
「ヒッキーの捻デレ…可愛い」／／／
「先輩…もうほんとに捻デレなんですからぁ」／／／
「比企谷君…」／／／
「ハチマーンッ！我を見捨てないでくれぇ!!」
「材木座…」
「八幡！」
「かｅ…」
「「帰って」」
「ん？」
「ヒェ！」
材木座には悪いが…この空気はキツイだろうから帰らせようとしたんだが…３人の殺意の眼差しが…材木座の胸に突き刺さっている。
「八幡のバカァァ！」ダッダッダ
「戸塚俺とけっｋ…」
「ごめん！僕部活だから！」
「えぇ…」
「彩ちゃん！ばいばい！」
「お疲れ様です～！」
ガラガラ
「……」
「……」

「……」
「……」
「よし帰ろ！」
「「待って」」ガシッ
俺は少しどころか…危うくちびるレベルまでびびった。
だって…
めちゃくちゃ…獲物を見る目で俺を見ていたから…
「ヒェ！オタスケ」
「元に戻るまで…身の回りのお世話をします！」
「比企谷君は1人だと何も出来ないもの」
「ヒッキーのお世話は私たちに任せて！」
「小町ィ」
続

第2話

「は？」
　ありのまま今言われたことを話すぜ！今小町と電話をしているんだがな、小町が衝撃的な言葉を放ったんだぜ！
「ごめんね！お兄ちゃん！旅行が決まっちゃって！」
「ちょっと待て？誰とだ？あの川なんとかさんとこの弟とじゃないよな？」
「お兄ちゃん…そんなわけないじゃん。」
　まぁ親と行くんだろうな。え？泊まりの後に行くの？タイミング悪くね？
「んじゃ！そゆことで！」
　切れた…
　ってかいつ帰ってくるのん!?小町ちゃん!?お兄ちゃん悲しいよ！今は弟か…そんなことはどうだっていい！良くないけど！
「…!?」ゾクッ
　視線を感じる。
「(振り返ってみよう)」
「…」クルッ

「……」ジーッ
「／／／」ジーッ
「ヒキガヤクン」ジーッ
「・・・　ヒイ！戸塚ぁ～助けてぇ～」
　怖い怖い…見られてる見られてる！
「マ、マッ缶飲むか～ってねぇじゃん…買いに行くか～」
「……」クツヲハキハキ
「…」クツヲハキハキ
「ニコニコ」クツヲハキハキ
　なんで無言で靴を履いてるんだよ！怖ぇよ！
　そして近場の自販機に到着。

「……」
「……」ギュー
「…」ギュー
「……」ギュー
「なぁ」
「「どうしたの？（ですか？）」」
「なんでそんなに寄り添ってるんだ？」
「それはですね～」
「ヒッキーが！」
「か…可愛いからよ／／／／」
かっ！勘違いし　ないでよね！べ！別に嬉しいとかないからね！
「そ…そうか／／」ポリポリ
午後２３時になった。俺は寝る！絶対寝るからね！いい夢を見たい!!戸塚とキャッキャウフフな夢に向かって！さぁ行こう！
「んじゃ、俺寝るからベッドは小町のを、足りなかったら親の使っていいからな」
「「はーい」」
「お休み」
「「お休みなさい～」」
こういう時、どんな顔すればいいのか、分からないの
「笑えばいいと思うよ」
無理だろ。
～～～～～～～～～
「寝ましたね」
「相変わらず可愛いなぁ」
「えぇ…そうね」
ここから私たちの戦いが始まる。
「先輩とラブラブデートに行くのは私です！」
「いいえ一色さん…比企谷君とら…らぶらぶ…デートに…いくのは私よ」キリッ
「あたしだって！ヒッキーとデートするもん！」

私たちは先輩…いや八幡に恋をしている。好きになったきっかけはそれぞれ違うけど…それでも好き。
小さくなってしまった。でもこれはチャンスなのかもしれない。今のうちに、勝ち取らないと！負ける！
「先輩は妹萌えなんですよぉ、私は妹ではないけど、後輩として先輩に甘えてます。つまり！私は妹的存在！っというより先輩は年下好きなんですよぉ！」
「一色さんの言ってることには一理あるのだけれどｓ…」
「ヒッキーは胸の大きい人が好きなんだよ！」（唐突）
雪ノ下　ＫＯ
「…」ｏｒｚ
「雪ノ下先輩…ファイトです」
「な、なら…こうするべきだと思うのだけれど」
～～～～～～～～
「どうしてこうなった」
やぁ！みんな！俺の名前は比企谷八幡。今目の前にある貼り紙を見ているよ！そこにはなんて書いてあるのかな？
［月曜日は雪ノ下雪乃］
［火曜日は由比ヶ浜結衣］
［水曜日は一色いろは］
［木曜日は雪ノ下雪乃］
［金曜日は由比ヶ浜結衣］
［土曜日は一色いろは］ドヤ
［日曜日は皆で］
俺はトイレに逃げた。
「俺の休暇が！俺の！スローライフがぁ～！」
戸塚に会える時間が…ない…だと…!?
そして今日は土曜日…ってことは…
コンコン
「だーれ」
「い～ろ～は～で～す～よ！」

「なーに？」
「デートに行きますよ！」
　トイレ…お前のことは忘れない。
「…でどこに行くんだ？」
「ん～…先輩はどこに行きたいですか？」
「おうち」
「私の家ですかー？もう～そういうのはまだ早いですよぉ～」／／／
　は？ひ？ふ？へ？ほ？何言っちゃってるんだ？この子は…
「何言ってるんだ…俺たちまだ付き合っｔ…」
「とりあえず～お腹すきましたよね～」
　スルーですか…さいですか。
「確かにそうだな。サイゼでも行くか」
「いいですね～」
　ん？珍しく乗り気だな。
「なんかあったのか？」
「別に～」（先輩…やっぱり小さくて可愛いなぁ…元々かっこいいし可愛い。捻デレ＋ツンデレがまたいい）
　なんかすごいにやにやしてて…怖い。
「ミラノ風ドリアとセットドリンクバーください」
「私はミートソースボロニア風パスタとセットドリンクバーで」
　これで５００円。ワンコインで食える幸せ。やはりサイゼ、サイゼは世界一ィィィ！
「んじゃ飲みもん持ってくるわ。何がいい？」
「いえいえ！私が行きますよ！」
「えっだって」
「先輩は小さくて可愛いから狙われますよ！」
「なわけあるか」
「むぅ！」
　何この子可愛い…は！待て待て落ち着け八幡。これはちびっこサイズだからであって…そうだ！一色は母性本能が覚醒しているんだ！きっとそうだ！

「じゃ…じゃあ頼むわ」
「はーい」
あっ飲みもん何にするか言ってなかったわ。
「はいどうぞっ先輩」
「おう」
いろはさん!?すげぇな！今飲みたいと思った白ぶどうじゃねぇか。
何この子エスパーなの？なんか飲みもんだけじゃなくて胃袋も掴まれそう。
そしてドリアとパスタが届いた。相変わらず３００円とは思えんクオリティである。千葉のサイゼ最強！
アタイッテバサイキョーネ！
チョットクチニケチャップガツイテルヨ！
「先輩～」
「ん？」
「あ～ん♡」
「いやえっと関節ｋ」
「あ～ん♡」
「分かったよ」パクッ
美味いな。流石サイゼ。（現実逃避）
「っておい！」
一色は俺が使っていたスプーンで…俺のドリアを食べた。
これが関節キスってやつか…まさか小さくなってからするとは誰も思わんだろ。いやまず小さくなる時点で某名探偵の世界線にいる。
「美味しいですね！先輩！」ニコッ
守りたいこの笑顔。ん？何言ってるんだ？守るのは戸塚だろ？でも一色も可愛いな…おいこら。
「お、おうそうだな」
俺たちは昼食を終え…次はどこに行くかを話し合っている…のだが。
「ん～カラオケとかどうですかぁ？」ギュー
「あっあぁいいんじゃねぇの？」

これさ…傍から見たら姉と弟…だよな？
なんかすごいお姉ちゃんしてるわ。一色。
……
アニソンを歌うとめちゃくちゃ楽しい。これはみんなも同じだろう…だがな、アニソンを聴かれると…ちょっと恥ずかしい。分かるか？この気持ち。一色はめちゃくちゃいい笑顔で聴いてくれるんだよ。いつもなら「先輩…アニソン歌いすぎですよ…正直キモイです」っとか言われそうなのに！守りてぇ！

これが2時間続くとは誰も思わないだろう。しかし声が高くなってて女性ボーカル歌いやすいわ。
「先輩…声が高くなってもいい歌声ですね！」（低くてもかこかわなんですけどね☆）
「おう…なんかありがと」
俺達はカラオケを終え…卓球、ボーリング、映画、ゲーセンなどで遊んだ。

「綺麗ですね～」
現在午後21時。
空は暗く…明るいのは建物。そんな景色を見るのは久しぶりだった。手摺が邪魔でよく見えないんだけどな。
「夜景見えないんですかぁ？」ニヤニヤ
「う、うるせ」
「よいっしょっ」ダッコ
「ちょっ怖い怖い」
「ご、ごめんなさい」シュン
抱っこは諦めてくれた。流石一色いろはである。てかシュンな顔やめて？可愛いから。勘違いしちゃうから。
そして近くにあったベンチに腰掛ける。
「先輩…」
「ん？」

「先輩は私たちの変化に気づきましたか？」
　その問いに俺は少し頷く。確かにそうだった。小さくなって初めて会った時…3人が変わっていた。由比ヶ浜はなんかいつも通りっぽかったけど…少しだけ違ってたり、雪ノ下はまるで猫かのように接してくる。あと罵倒も言わなくなっていた。一色もお姉ちゃんしていた。か、勘違いしないでよね！小町の方がお姉ちゃんだもん！……複雑だな。
「あれ…全部素なんですよ？」
「は？」
　素？え？どういう事だ？
「やっぱり先輩って鈍感ですね…」
「悪かったな」
「まぁ先輩らしくていいですけど……。つまりですね！」
　一色は頬を赤く染め…俺の目を見て、手も強く握り締めて言う。
「「先輩が好きなんです！」」
　俺は一瞬…頭の中真っ白になり、何も理解できなかった。
「今までの行いは全て素なんです！」
「それと小さくなったことは関係してるのか？」
「いえ…正直小さくなっていたことは知らなかったです。お米ちゃんにメールで聞いて初めて知りました」
　やはり小町か…だと思ったよ。由比ヶ浜の「約束したでしょ!?」はそういうわけか…
「ちなみにお米ちゃんにこれが送られてきまして」
「小町…許すわ」
「許しちゃうんだ!?」
「てかさ…なんで俺がちびっこになってから、素で接するようになったんだ？」
「それは…」
　やっぱり母性本能か？知らんけど…
「私も、結衣先輩も、雪乃先輩も、ショタには勝てないってことです☆」
「ショタって単語知ってるんだなお前」

「そこですか!?」
まぁ、仮にも肉体年齢は小学生だしな…傍から見たら、大人気ないだのなんだの言われるからな。
「正直…今の告白は想定外でした。先輩とデートして、ここで告白する予定だったので、まさか先輩が小さくなるなんて……夢の中での出来事だったんで…はっ！」
「ゆ、夢の中？」
「い、今のは気にしないでください！ほら！風邪引いちゃいますから！帰りましょ！」
「お、おう」

一色は赤面しながら俺の手を握る。俺は思った。勘違いとかじゃない気がするが、これは「「お姉ちゃん」」してるんじゃなくて、好きな人と帰る感覚でいた。俺も、もしかして…。
「(俺も意識してるんかな一色だけに…)」キリッ
「先輩…何赤面してるんですかぁ？」
「ちげぇよ…ちょっと寒かっただけだ」
「ふ～ん？（相変わらず捻デレだなぁ♡）」
正直な話、少し、少しは照れた！以上！これ以上は言わん！てか…明日日曜だよな。プリキュア観なければならない！（使命感）
続

第3話

日曜日、朝の7時半。
俺は3人に起こされ、朝飯を食う。
「今日は私が作ったのだけれど、口に合うかしら？」
「朝からこんなの食えるなんて、贅沢だ。店に出せる」
「そ、そう／／／良かったわ」
朝から豪華な飯を食える。小町の飯の方が美味しいが、高級料理店に出せるレベルで美味い。
「今日は4人でどこ行きます～？」
「そうだね～動物園とかどう？」
「いいわね、ネコ科の動物が見てみたいわ」
「先輩はどうですか？」
最近動物園に行くことはなかったからな、たまにはいいかもしれん。
「おう、動物園でいいぞ」
朝飯を片付け、外出する準備をする。俺は着替えてる最中、あることを考えた。
あいつら、親になんて言ってるんだ？
そういえばあいつらは親になんと説明してるんだろうか、俺の親は小町が言ってくれたらしいが…
まぁ深く考えるのはやめだ。あいつらはあいつらでなんか言ってるんだろ。雪ノ下は…雪ノ下さんがいるから大丈夫だろうし。俺をこんな姿にした犯人だけど、まじで某金田一来てくんねぇかな。
「ヒッキー！準備できたー？」
「おう、今行く」
まぁたまには、こういうのもいいかもしれんな。
……
無事、動物園に着き、入場料を払った。俺は小学生料金で入れたので、ラッキーだった。
「久しぶりに来ましたね～」

「そうだね！私も中学生の頃に行ったくらいだよ～！」
「ネコ科の動物…どこかしら？」
グゥゥー
「「……」」ジーッ
「俺じゃないッ！」
「そこは俺だなって言うべきですよ～？」
「えぇ、なんで怒られてるの？」
しかし…小学生サイズになってからか、由比ヶ浜達がお姉ちゃんをちゃんとしてる。まぁ気持ちは分かるが、俺も小町がいるからな。あと戸塚。戸塚も最高のいもうｔ…じゃなくて、おとうｔ…じゃなくて天使だ。
「じゃあそろそろお昼だし、ご飯先に食べよっか！」
「どこ行きます～？」
「お弁当でも作ってくれれば良かったかしら…」
「大丈夫だぞ、そこら辺にレストランあるだろ、探そうぜ」
「えぇ、探しましょ」ギュッ
「…／／」ポリポリ
「むぅ」
「むぅ」
動物園にレストランがあるか知らなかったが、まさかあるとはな。
「あっ、ここレストランじゃなくてフードコートなのか」
フードコートだった。レストランよりレベルアップしてるじゃねぇか。助かるわ～
「ヒッキーは何にする？」
「じゃあラーメンするわ」
「先輩ラーメン本当に好きですね…」
「まぁな。ラーメンとマッ缶で栄養摂取してるまである」
「それ不健康よ。次からお弁当作るわね」
「私も手伝います～♪」
「私も！」
「由比ヶ浜さんは盛り付けをお願いね？盛り付け得意そうだから」

「うん！」
雪ノ下は由比ヶ浜が傷つかないよう…慎重に言葉を選んだように思えたが、俺にはバレバレである。
そんなこんなで、何故か俺はお子様ランチになっていた。
「いやさ、元はと言えば俺がお前らに頼んだのが悪いんだが…なんでお子様ランチになってるんだ？」
「いやなんとなく～」カシャカシャカシャ
「そうね、お似合いだと思うのだけれど」カシャカシャカシャ
「美味しそうだねー！」カシャカシャカシャ
ピロリロリン
「小町からか」
［お兄ちゃんｗｗ写真見たよｗ可愛いねｗ小町笑いとまんないｗｗｗ］
［笑いたきゃ笑え、お兄ちゃん泣くから］
［ごめんて…ぷぷ］
「メッセージでぷぷとか言うな、余計に泣きたくなる」
［帰ったらイロイロ教えてね？］
［なんでカタコトなんだよ］
［温泉入ってくるから！また！］
小町に笑われた。お兄ちゃんちょっと嬉しいね。
「そろそろ食べましょう」
嬉しいのか恥ずかしいのか、ちょっとよく分からない状況下で雪ノ下は俺の心をスルーした、わりには顔を赤くしながら携帯を眺める。
「「いただきます」」
「美味いわ。ん？てかお子様ランチって値段安いよな？これサイゼに勝てるんじゃね？」
「先輩…元のサイズに戻ったらお子様ランチ頼めないですよ？」
「ちくしょう」
お子様ランチ強い説を検証したかったが、小学生までしか頼めないらしい。やはりサイゼが１番なのだ。

「「あ～ん」」
「は？」
なんで毎回食わせようとするんだよ。俺は子供じゃねぇ！子供だけど、
「いや、いいって」
「駄目です！ちゃんと食べないと！」
「育たないわよ？」
「大きくなれないよ!?」
いや、俺元のサイズに戻れば結構体つきいいと思うんだが…てか息ぴったりだなお前ら、いつ練習したんだよ。
結局食べた。
飯を食い終え、動物園をぐるぐると回った。雪ノ下は虎とかネコ科の動物をガン見していた。
俺は右を向いて、ライオンを見る。
ライオンってすげぇな。夏とか暑くないんかね？どんな毛並みしてるんだよ。って雪ノ下はどこにいるんだ？
由比ヶ浜と一色はトイレに行ってるのでどこかのトイレの前に集合してるだろう。
「トイレって言っても、別れた場所から離れてるから、どこのトイレに行ったんだ？」
探すしかない。
・・・
迷子になった。
まさかこの俺が迷子になるなんてな、雪ノ下じゃあるまいし、とりあえず探すか…
「君」
俺の背後からでも声が聞こえる。なんかすげぇ聞き覚えがあるんだが…
俺は後ろに振り向く。
「迷子か？」
葉山隼人。俺が小さくなってから1度も会っていない人物。まぁ

教室に行かなかったしな。
「お母さん達とはぐれたのかい？」
「うん」
ここから逃げたい。
「一緒に探そう？」
「大丈夫、多分トイレだろうし」
頼むから、今は来ないでくれよ。雪ノ下達よ。
「先輩！探しましたよ！ってあっ…」
タイミングがおかしい！なんでだよ！なんで今来るんだよ！ドッキリ？ドッキリなの？八幡泣いちゃう！
「ん？いろは？先輩？どういう事だ？」
「えっとですねぇ～あの～」チラッ
あっ、被害者の俺が話せってか。まぁ葉山家と雪ノ下家は交流あるし、葉山もきっと分かってくれるはずだ。
「もう隠すのはやめだ。葉山…俺は比企谷八幡だ」
「なんで縮んでるんだ？」
「雪ノ下さんだ」
「あっ…そうか、なるほどな」
察してくれたようだ。人生で初めて葉山に感謝している。なわけあるか！お前が動物園にいるから悪い！つまり！俺は悪くない！
「やはりヒキタニくんだったか、なんかその…おつかれ」
「うるせぇ、同情するな。お前こそなんでいるんだよ」
「由美子たちとね」
「三浦か」

もうヤダ帰りたい。
「ってことなので、葉山先輩さよならです！」
「あぁ、ヒキタニ君頑張れよ」
「えっあ、あぁ」
まぁ、犯人は雪ノ下さんなので、某名探偵が出る幕ではないな。
「いや～まさか、あんな形でバレるとは思いませんでしたぁ～」

「だろうな、そもそも葉山が動物園にいることが不思議だわ、三浦が行きそうな所と言ったらオサレな喫茶店とかしか思い浮かばないからな」
　まさか動物園、ほんと…泣きてぇ。
「ヒッキー!!!」
「比企谷君！」
　ん？なんか視界が暗くなったぞ、ポケ○ンのバトルに負けたのか？
　そんな冗談はさておき、
「どうした…って、えっ？」
　俺の目の前で、俺に抱きつく雪ノ下は…
　泣いていた。
「どうしたんだよ雪ノ下」
「ごめんなさい…私が…私が」
　どうやら自分が迷子になってしまったことで、俺とはぐれたから。
「いいんだよ、俺も周りを見てなかったからな」
「ひきがやぐん…グスッ」
　雪ノ下は本気で泣いていた。こんな顔を俺に見せるのは初めてかもしれん…
「ヒッキー、ほんとよかったよ～」
「わりぃな心配かけたわ」
「ほんとですよ～！先輩はぼっちなんですから私たちとはぐれちゃダメですよぉ？」
　昨日、一色が言っていた事は本当だった。俺はこんなにも大事にされてたんだな。
「はいはい、んじゃそろそろ帰ろうぜ」
「そうですね～」
　道中、雪ノ下は俺の手を握りしめてこう言った。
「もう、この手を離さないわ」
「おっおう」
　身長差でよく顔が見えないが、雪ノ下の顔はものすごく赤くなっている。

なんだろう、小さくなったおかげで、俺が想像していた「「本物」」に近づいているのかもしれない。正直、あれは黒歴史だったんだが、今の状況でんな事言えるわけがない。俺は身を委ねることしか出来ない、抵抗したくても、抵抗できない…いや、しないんだ。俺にもよく分からないが、抵抗しまったら離れてしまうんじゃないかと思ってしまう。

「ヒッキー？どうしたの？」

「ん？あぁなんでもない、ちょっと腹が減っただけだ」

何故だ？なぜ俺はこの生活を続けたいと思う？何故なんだ？

「なら、スーパーに寄っていこうかしら？」

「材料もうないですもんね！」

「だねー！行くよーヒッキー」

「おう」

「「俺は、本物が欲しい」」

そもそも俺は、なぜこんな黒歴史を生み出してしまったんだ、と思っている。そしてなぜ由比ヶ浜と雪ノ下に言ったんだろう。俺が2人を信用していたからなのか？正直分からない。

「何か食べたい物はあるかしら？」

「んーハンバーグ！」

「俺はカレーかな」

「私も先輩と同じで！」

「ではカレーで決まりね」

「むー！」

「由比ヶ浜さん、次はハンバーグにするから、今日は許してくれるかしら？」

「分かった！ゆきのん！」ギュー

チョッユイガハマサン、アツクルシイノダケレド／／／

肉体年齢が下がるなんてこと、非現実的なのだが、ソースが出来上がってしまったから、もうノーコメントでいいや。

「美味いな、五つ星グルメだわ」

「星増えてる!?」
「それくらい美味しいってことですよ！」
「そう、それは良かったわ、作った甲斐があるわ」
まぁ、理由がなんであれ、俺たちは「「本物」」を手に入れたのは間違いじゃない。それだけは事実なのだ。
「「ご馳走様でした！」」

小さくなって良かったのかもな。
「そろそろお風呂入りますかね～」チラッ
「そうね、誰が先に入るか決めておかないと…」チラッ
「だねー！」チラッ
前言撤回、やっぱり肉体年齢が下がるのは嫌だ。早く戸塚に会いたい。
「てか、なにチラチラ見てんだよ」
「安心してください！水着着るんで！」
「安心できるか！俺の理性が持たんわ」
「ヒッキーになら」
「比企谷君になら」
「先輩になら」
「「いいよ？（わよ？）（ですよ？）」」
「勘弁してくれ…ついていけない」
俺は思った。
「やはり俺が小学生サイズになるのは間違っている」
続

第４話

ＡＭ７時

今日こそは、家で寝ていたいところだが、平塚先生に腹パンされそうなので、行くか。

「で、なんでお前らは呑気にテレビ観てんの？」

俺の家から学校までそれなりに距離がある、それに、自転車は１台しかない。

「えー？歩いていくんですよ！」

「え？馬鹿なの？アホの子なの？」

ん？てか今歩いていくって言った？つまり一緒に登校するってこと？もしそうなったら…

～～～～～

「え？ひ…比企谷なの…か？」

「おう、かわ…川なんとかさん」

「川崎だ！いい加減覚えてよ」プイッ

「（ツンデレだ）」

「それよりあんた、なんでそんな小さくなったんだよ…可愛いんだけど…／／／」

「今の俺が言うのもなんだが、ショタコンだな？」

「う、うるさい！」

～～～～～

川なんとかさんはこうだろうな…戸塚ぁ～戸塚に撫でられたいなぁ…それだけで人生の半分以上得してる。あとの半分はＭＡＸコーヒー。小町は俺の妹なのでノーカン。愛してるぞ！小町！

「ヒッキーなににやにやしてるの？」

「比企谷君…その顔は相変わらず変わらないのね…」

昔の俺は無邪気なボーイだった。多分戸塚には勝てない。

っと思っていたがつい口が開いてしまっていた。

「昔の俺は無邪気だったけどなぁ」

「「!!??」」

多分小町も俺の幼少期を雪ノ下達に話してないだろう。てか覚えてないと思う。お兄ちゃんショック。
「そういえば比企谷君」
「はい」
「今日は月曜日なのだけれど…」
「ここで、過ごしましょう」
「いいぞ」
ガタッ！
「どどどど言うことですか!?」
「ゆきのんだけずるい！」
「あら？今日は月曜日、だから私の好き勝手に比企谷君といちゃ…こほん、時間を過ごしてもいいと思うのだけれど」
「そうですけど！どこにしまってあるかだけでも、教えてくださいよ！」
「そーだ！そーだ！」
「いやよ、２人の秘密よ」
俺は今日も部室で適当に自習をして、読書してマッ缶飲んで、ぐーたらしていたら、あっという間に放課後になってしまった。
やがて３人も部室に入り、アルバムがあーだこーだ言って、争いは止まない。
あ～、今日もＭＡＸコーヒーは美味いなぁ～。戸塚に会いたいなぁ…最近戸塚に会えてないから、八幡的にポイント低くなってきてる。
（ばなな）
「はちま～ん！」
「この声はッ!?」
俺は死んだ魚の目をしていたが、この声を聞いた途端、目にハイライトが！
ガラガラガラ
部活後なのか、汗がタラタラ垂れている戸塚がきた。
ウッ！目が開けられない…だと!?天使だ天使がわざわざ部室まで来てくださったぞ！

皆！礼！彼？彼女？はこの学校の天使、戸塚様だ！
「ありがとうございました」
「ふぇ？どうしたの？八幡？」ウワメヅカイ
俺が学校を頑張れるのは、戸塚がいるからなんだね。
「比企谷君、顔がニヤけてるわよ」
「ヒッキー、さいちゃん好きすぎでしょ」
「まったくです！」
「八幡！アイス買ってきたんだけど、いる？」
「いいのか？」
「うん！由比ヶ浜さん達もどうぞ！」
部室は暖房がついてる。そしてアイスを食う。
これが美味いんだよな。
「ありがとな、今度なんか奢るわ」
「いいよいいよ！気にしないで！」
～～～～～
戸塚の笑顔を眼福したのでそろそろ帰ることにした。
「じゃたまたあとでな」
「うん！じゃーね！」
「むぅ…またあとで…」
雪ノ下は俺の手を強く握り、
「さぁ、帰りましょう…は、八幡／／／」
「お、おう／／」
道中、スーパーに寄り食材を買う。
「今日の夕飯はなんだ？」
「ビーフシチューを作ろうと思うのだけれど、どうかしら？」
「ビーフシチューか、いいな」
「由比ヶ浜さん達にも一応聞いておくわ」
そういうと、携帯を出して、ポチポチと文字を入力する。
「な、何よ」
「いやぁ、雪ノ下も成長してるんだなぁってな」

「それはどういうことかしら？」
　これ以上は、言わないでおこう。
「由比ヶ浜さんから連絡きたわ、食べていくから明日のご飯にって」
「ん」
　雪ノ下と買い物を済ませ、家に帰る。
「では作ってくるから、ゆっくりしててちょうだい」
「いや、俺も手伝うぞ？」
「でも…」
　雪ノ下は俺の体をチラチラ見て、少し笑いながら言う。
「貴方のその身長じゃ、お皿取れないでしょ」クスクス
「…そ、そうだな…んじゃ本読んでるわ」
「えぇ、そうしてちょうだい」
　正直可愛いと思った。なんか鼻で笑われた気分で…少し心にきたけど…
　しばらくして、雪ノ下の声が聞こえる。
　ガチャ
「比企谷君、さっきから呼んでいるのだけれど…」プクゥ
「可愛い」
　すまんすまん、気づかなかったわ。
「か、かわ…かわ…いい／／／」
　本音と建前が逆になってしまった！死にたい！死にたいよぅ!!
「わ、私が可愛いのは当然でひゅ…」
「今噛んだ？ねぇ？今噛んだの？」
「うるさいわよ！これ以上言ったら夕飯抜きよ！」／／
「すみませんでした」
　雪ノ下が可愛いすぎて、やばい。そしてビーフシチュー美味い。全世界の料理人を倒すレベル。
　食事の後はやはりデザートだよな。
　カシュ　ゴクゴク
「やっぱりＭＡＸコーヒーは美味いぜ」
「それはデザートに入るのかしら」

「練乳だからセーフ」
「ところで、お風呂はいいのかしら？」
「あぁ俺はいいかな…」
「では私は入ってくるから、覗かないように」
「しねぇよ…」
「本当かしら…フフフ」
いくら健全な男子高校生だからといって、同級生のお風呂を覗くなんて、ありえないんだからね！
っとＭＡＸコーヒーを冷蔵庫から取ろうと立ち上がった。
「んぁ、ＭＡＸコーヒー切らしてたか」
冷蔵庫にはＭＡＸコーヒーが入っていなかった。
「仕方ない、買いに行くか…」
俺は小銭入れを持ち、雪ノ下に一言言ってから、家を出ることにした。
雪ノ下の承諾を得て、家を出る。ってか…
「迷子にはならないように、夜道だから気をつけて」
って、俺は子供かよ、肉体は子供だけど精神は立派なジェントルマンなんだぞ！
近くの自販機にたどり着き、ＭＡＸコーヒーを買う。
「比企谷君じゃん！」
「えぁ？」
急に話しかけられたから、変な声出した。それよりこの声は、俺が恐れていた魔王が出現した。
「ひゃっはろ～」
「早く某名探偵に自首してください」
「真実はいつも１つ！」
「この状態を本当に真実にしていいんですか？これはきっと夢ですよ」
「つねってあげるよ」
「遠慮します」
この人、俺をこんな身体にしたのに、責任取ってほしい…てか早く

戻りたい。戸塚のお兄ちゃんしたい。お兄ちゃんじゃなくて弟なのは間違っている。
「最近どうなのよ～」ウリウリ
「まぁ3人とも様子がおかしかったりはしますけど、それ以外はいつも通りですね」
「ほんと、鈍感ねぇ～」
本当は分かっているんだ。3人とも俺に好意を抱いていることに…でもそれを、信じきれていない自分がいた。信じたい…受け入れたいと思ってるが…俺ではなくあいつらが不幸になるんじゃないかと、考え込んでしまう。
「本当にそう思うかな？」
「え？」
「ゆきのちゃん達が、そんな子達だと思う？」
「いや…」
「じゃあ、いつか答えてあげないと！」
「まぁ…そうですよね」
俺が曖昧な返事をすると、雪ノ下さんはニコッと笑い…
「3人の気持ち、ちゃんと聞いてあげてね？」フフフ
その笑顔は、優しい笑顔だった。そして少し悲しげな顔をしていた。
家に帰ると、雪ノ下は猫のかまくらを撫でて、揉んで、撫でて、の繰り返し。
「にゃー！にゃっ！にゃにゃにゃ～♪」
「？」
どうやら俺に気づいたようで、顔を真っ赤にする。
「ひ、ひきぎゃやくん！これは……違うのよ」キリッ
いや可愛いすぎんだろ。
「まぁ、なんだ？俺は何も見てない。いいな？俺は何も見てない」
「えぇ、貴方は何も見てないわよ」
嘘です見てました。
カマクラは雪ノ下に懐いてるようで、膝の上に乗ってくつろいでい

る。猫は年中暇そうで羨ましい。
「比企谷君、そろそろアルバム見せてくれないかしら」
「おっ忘れるところだったわ、んじゃ持ってくるわ」
アルバムを取り、雪ノ下に渡す。
久しぶりに見ると俺ってこんなに無邪気だったんだなぁって、幼稚園児時代だけだけどな…
「昔の貴方も、可愛いじゃない」ボソッ
「ん？なんか言ったか？」
「いいえ、なんでもないわ」
若返ったことにより、俺は新しい発見をした。
「俺って、目が腐ってなかったんだな」
続

5話

ピピピピ
「・・・頭いてぇし、なんか目眩がするな…って」
ち、遅刻だァァァァ!!!!
おはようございます。比企谷八幡です。今俺は、天国が地獄かの選択肢があります。
天国↑
地獄
仮病使って休も。てかあいつらなんで起こしてくれないんだよ…泣くぞ。
プルル
仮病の電話をしようとした時、どうやら向こうから、お出ましのようだ。
「もしもし、ゴホゴホ」
「もしもし、こちら総武高校2年F組の担任、平塚静と申します。比企谷君のお宅でしょうか？」
「俺です」
「おい」
怖いよぅ…静ちゃん怖いよぅ。
その声は、泣く子も黙るし、老若男女問わず怖気付くだろう。
「お前、学校に来ないとはいい度胸をしてる…」ボキッボキッ
微かに聞こえる骨の鳴る音。あっこれ終わったわ。
「風邪引いたんですよ。いやまじで」
そうだ。仮病使って休もうとして、体温計を魔改造しようとしたんだが、ちょっと1回試しに測ってみたら37．6あってビビった。これマジです。
「あぁ～そういや、由比ヶ浜が言ってたな、「ヒッキーが赤面してる！」って」
何言ってんのあの子。
「そうか、なら許そう。安静にするように」

「うす」
とにかく頭が痛い。寝よう。
の前に、トイレに行きたい…が上手く歩けない。
「死ぬぅ…死んじゃうぅ」
腹も減った。でも食いたいのはラーメンとかじゃなくてお粥が食いたい。棚届かんけど…俺ちびだから…
てか歩けねぇ…頑張れ俺の足。
「間に合ったわ…」
だが、部屋まで戻るのはキツイな。こういう時、誰かいて欲しいってのはあるな。小町ィ！頼むよぉ～、戸塚に看病されたいィ～。
何とかベッドに辿り着いた。寝る！
ベッドの横には雪ノ下と一色の置き手紙がある。親と生徒会しか読めなかったが、まぁ理解出来た。
「しんどくなってきたからそろそろ寝るか」
小さくなったおかげで、広々～と思いながら横になるこの姿はまさに無邪気な子供のようだ。肉体年齢は子供なんだがな…っと思いながらゆっくりと眠りにつく。

「うーん…」
何時間くらい寝たんだ？もう日が暮れている。夕方？
「ってか、おでこが冷たいな」
おしぼり…誰か家に帰ってきたのか…でも一色は生徒会、雪ノ下は実家にお呼ばれだったような。てことは由比ヶ浜か…
「よっしょっ」
ほんの少しだけ、体が軽くなった。だがめちゃくちゃ腹が減ったなぁ。
ガチャ
「あっ！ヒッキー！起き上がっちゃ駄目だよ！」
ドアを開けて入ってくる由比ヶ浜。エプロン姿似合いすぎだろ。
「由比ヶ浜、腹減ったんだ。なんかないか？」
「お粥作ったよ！」

「俺にトドメを刺すつもりか…？」
「私をなんだと思ってるし！」
　由比ヶ浜が持ってきたお粥は、普通のお粥だった。
「頂きます」
「あっ！私が食べさせるよ！」
「いや、食えるんだg…」
「むっ！」
「お願いします」
　勝てない。勝てないよぅ…
　お粥を食べ終え、もう少し寝ることにした。
　暫く時間が経ち、俺は歩けるくらいには回復した。これも由比ヶ浜の看病のおかげだな。
「あっ、ヒッキーもう大丈夫なの？」
「ずっと寝てたからな、マッ缶飲みたいから買ってくるわ」
「私が買っといたよ！」
「財布どこしまったっけな」
「だから、私が買ってるって！」
　マッ缶切らしてたのすっかり忘れてた俺は、財布を持って外に出ようとする。ん？由比ヶ浜が何か言ってる？あはは、そんなわけない。いつも飲みすぎだって注意するんだぜ？
　耳を澄ませてみよう。
「むぅ…ヒッキー…もうマッ缶あげないもんね！」
「許してください、お願いします、」
「しょうがないなぁ？」
　まさか、由比ヶ浜がマッ缶を買ってきてくれてるとは…これは夢か？夢だな。うん寝よう。
　てかチョロガハマさんすぎません？
「マッ缶…愛してる」
「ヒッキーそれはキモイ。いやまじで」
「泣くよ？飲み物に恋愛感情は必要なんだよ！飲む時…」
「飲む時…？」

「いや、忘れてくれ」
何かを察したのか、由比ヶ浜は赤面して手で顔を隠して…頭をフリフリしてる。
死にたい。今ものすごく死にたい。感情移入すんなって黒歴史製造すんなって…俺なにしてんの…
「ヒ…ヒッキー／／／」
赤面したままの由比ヶ浜が俺の名を呼ぶ。モジモジしながら自分のお団子を撫でる仕草がくそ可愛い。悔しいけど…
「な、なんだ？」
由比ヶ浜は照れながら言う。
「ちゅー…する？／／／」
少しずつ近づいてくる由比ヶ浜。俺は硬直して動けなかった。脳の処理が追いつかなくて…
「ちょ、お前何を…」
すると由比ヶ浜は少しニヤニヤしながら言う。
「今のヒッキーは小さくて可愛い男の子だから抵抗出来ないもんね！」
少しずつ顔が近づくにつれ、由比ヶ浜の顔はどんどん赤くなっていく。
「あの二人にファーストキスされるなら…私がするもん！私だってやればできるもん！」
俺に発言権は無いようです。誰か帰ってきてくれぇ！
ガチャ
「ただいまで～す!!」
一色の声が聞こえると、由比ヶ浜は少し悔しそうに、
「あと少しだったんだけどなぁ…」
っと言いながら立ち上がった。そして由比ヶ浜は言う。
「いつか頂戴ね！ヒッキー！」
その言葉の意味を理解するにはそう時間はかからなかった。俺はとんでもない修羅場に遭遇したのかもしれん。逃げたい。
「先輩！もう大丈夫なんですかぁ？」

「あぁ、由比ヶ浜が看病してくれたからな」
「御茶の子さいさいだよ！」
「先輩、よく生きていられましたね…だってご飯」
「私をなんだと思ってるし！」
どうやら帰ってきたのは一色だけらしい。まぁそうか、雪ノ下はあの親と姉の対応に苦労してるんだろうなぁと思いながらテレビ番組を観る。
ガチャ
「ただいま」
雪ノ下がいつもより疲れた表情をして帰ってきた。
「おう、おかえり」
「おかえりなさい！雪乃先輩！」
「おかえり！ゆきのん！」
「ええただいま」
「いつもより疲れてんな」
雪ノ下はため息をつきながら、
「姉さんと母さんは、少しばかりうるさくて嫌になるわね…」
っと珍しい発言をすると、俺に抱きついてきた。
「にゃー」
今、俺の細胞が死んだ。死因は尊死。
「まぁ抱き心地良いですもんね！」
「分かる！後で変わって！」
「私も変わって欲しいです！」
俺をなんだと思ってるんだ。
ピロリン
「ちょ、由比ヶ浜スマホ取って、俺動けない」
「ゴロゴロ」
「(雪ノ下が壊れた)」
「う、うん！」
「あんがと」
小町からだ。

「お兄ちゃん…ごめん！親に小さくなった事伝えるの忘れた！お兄ちゃん…由比ヶ浜さん達の家お泊まりした方が良いかも。お母さんたち帰ってくるらしい！カマクラのご飯は今日の分あげてね！明日からお母さん達があげると思うから！それじゃ！ごめんね！お母さん達にはお兄ちゃん泊まりに行ってるって伝えたから！泣いてたよ！」

なぜ泣く…そんなに感動するか…てかそんときに事情言えばよかったのにな…小町の悪い癖だ。

「つーわけで…助けて」

「私の家に来ましょう」

「私の家！」

「私の家に来てくださいよぉ先輩～！」

「ジャンケンしとけ」

神様、戸塚様。俺は何をすれば良いのか。直接来て教えてください。所謂家庭教師ってやつをしてくれ。

続

6話

水曜日の放課後…俺は一色の膝の上にまた座っている。
ちな、俺は現在身長１４３とかその辺…言うの忘れてたわ。
家でやるのはまだマシだが…学校でやるのは恥ずい。
死にたい。
「えへへ～！今日は私のおうち～♪」
説明しよう。昨日親が帰ってくるとのことで、急遽一色達の家に泊まることになった。
結果いつもの曜日で交代交代で俺を泊まらせるどのことになった。
長旅お疲れ。俺。
「スーハー」ギュー
傍から見たら「羨ましい。滅びろ！」「そこ代われ」「ハチマーン！コノウラギリモノー！」「こいつら交〇したんだ!!」とか言われてますが、そんな事してません。バキバキです。
俺は思った。
「なぁ」
「なんですかぁ？」
「なんで部室にずっと籠ってるんだ？」
せめて家で…いや家だともっとダメか。
「学校でイチャイチャできるのってなんか素敵じゃないですかぁ～」
「うん、分からん」
「むぅ、分からせてあげますよ！」
怖い！分からせるってなんぞ！
ホッペチュー
「!?」
頬に柔らかい感触が…
「口は身体が元に戻ってからですね～♡あの二人にファーストを渡してたまるもんですか！」
「え、あっあっ」
コミュ障がレベルアップしてしまった。俺の頭は再びオーバー

ヒート。燃えるぞハート燃え尽きるほどヒートしちゃう…
「私も本気なんですから♡覚悟してくださいね♡」
「あっあぁ…？」
　一色は俺を抱き抱えながら言う。
「今日はデートです…事前に帰るのは遅くなるとは伝えてます。」
「知ってるぞ。あいつらムスッてしてたよな」
「取り合い合戦してるんですから当然ですよ！」
　何故か知らんが材木座が可哀想になってきた。
「ヘックション！」
　そして俺らは学校を後にした。あっそういえば葉山達にはバレた。誰かにバラされた。泣きたい。
「で、今日はどこ行くんだ？」
「私が行きたいところは後で行きます！まずは先輩の行きたいところに行きましょう！」
「本屋一択、新刊と古本買いたい」
「了解です！」
　こうして、手を繋いで歩くのには慣れてしまった。慣れって怖いね。一色はいつも以上にウキウキしていた。
　今日は少し離れたところにある、本の街「神保町」にやってきた。学校が午前中に終わったということで行く時間ができた。
「本の街ってなんかオシャレですね～！」
「だろ？一色も読書に興味持ってもいいんだぞ」
「ライトノベル読んでみようかなっと考えていたんですよぉ」
　おっ、珍しいな…あの一色がラノベに興味を持つとは…
「今だから言えるんですけど、ぶっちゃけ先輩の影響ですかね…話すきっかけが欲しかったり、先輩とこうしてお出かけしたかったから…」
　そこまで考えてくれてたのか…なんか…嫌な気はしないな…むしろ嬉しいっつーが、分かってくれるの小町しかいなかったから…友達いなかったし…いかん、雨が降ってきたな。
「その、なんだ…そこまで考えてくれてたのは正直思ってなかった。

あ、ありがとな」
「…／／／　はい！」
いつもの一色ではなく本物の一色の笑顔を目の当たりにした。少しドキッとしてしまった。いつもしてた。
駄べりながら歩いていくうちに、お目当ての本屋に着いた。
「三省堂書店に着いたぁ！」
「ここの三省堂書店…大きいですね…」
「そうなんだよ。ずっと行きたかったんだ。品揃え豊富だから」
「参考書とか見てもいいですか？」
「おう！良いぞ。時間はたっぷりあるからな、俺も見る予定だったし」
本の街という事もあり、珍しい古本屋や店内が広々とした本屋もある。三省堂書店はいつ来ても飽きないレベルで品揃え豊富だ。まじでマニアックな本もある。
「お前は参考書何か買うのか？」
「そうなんですよ。ちょっと苦手科目を克服したくて…先輩は何か買うんですか？」
「俺は大学の赤本ちょっと見てた。あとは文系科目だな。」
「数学はやらないんですかぁ？」プププ
数学？は？何それ不味そう。俺は数学を使わずに大学行くんだい！
「私立愛好家だからな…数学はいらん」
「数学って将来職場で使うんじゃないですかね…」
「やめて！心を抉らないで？数学やらずに生きてきたんだから…忘れさせて!?」
「そう考えると、雪ノ下先輩がどれだけ凄いのか分かりますね！」
「それはまじで分かる」
雪ノ下はまじで凄い。だが国語はおれの方が上…異論は認めん。
そして俺たちは買いたいものを買い、三省堂書店を後にした。その後も、俺は古本を買ったり一色とスイーツとか食って神保町を散歩した。届かないとこを一色に取ってもらった時はものすごく恥ずかしくて…なんか…爆発した（語彙力）

その後は少し秋葉原のゲーセンなどに行って楽しんだ。
少し早めに電車に乗り、千葉に帰る俺たち。
「帰ったらご飯作りますね～親いないんで♡」
「え、なんで周りの人は親みんな出かけてるの？まじでよく分からん…」
「細かい事は気にしちゃダメですよぉ！」
「えっあっはい」
いつもは一色に振り回されていたが、今回は違う。一色は俺が行きたい所を優先してくれていた。俺が行きたいと思った所はあまり面白みがないと思うが、それでも一色は楽しんでくれたようだ。そんな楽しい時間はあっという間に過ぎていく。気づけば夜になっていた。
「今日は楽しかったですね♡せんぱい」
「…！」ゾクッ
耳元で囁かれた。
「急に耳元で囁くな…くすぐったいだろ」
「いいじゃないですかぁ♡」
「良くねぇよ…」
「それにしては、無抵抗だし顔赤いですよ？」クスクス
「うるせぇ…」
俺だって…男の子だからしょうがない。うん。皆照れるものなんだ。そうだ。知らんけど
ギュー
「…／／」
気づけば一色の家に着いていた。そして、一色の部屋に向かう。
「そういえば、私の部屋初めて来ましたよね？」
「あぁ、そうだな」
「何かご感想ありますかぁ？」
「その、なんだ？か、可愛い部屋…だな」
「…!!？／／／」
「ど、どした」
一色は驚いた表情をしながら赤面する。少しオドオドして、手をパ

タパタさせながら言う。
「先輩が真正直に言うとは思わなかったので…／／／」
　手を隠しながら言った。俺そんなに正直者だと思われてなかったの？ちょっとショック。八幡泣くよ。
「と、とりあえず夕飯作りますね！」
「俺もなんか手伝うぞ」
「いえいえ、部屋で座って待っててくださいね！出来たら呼ぶので！」
「お、おう」
　少し慌てながら部屋を出る一色。てか…俺何すればいいんだ…女子の部屋いい匂いするんだが…
……
「はわわわ!!…先輩が正直な子になってるぅ！」
　背が縮んでから、先輩がかっこいいから可愛いになってる！私たちで猛アタックしたからかな!?今の先輩が元に戻ったら私…もう目を合わせるのむりかもぉ！
「先輩、私たちのこと…どう思ってるのかなぁ…」
　私だって、やればできる！先輩達には負けません！
……
　しばらく時間が経ち、一色に呼ばれる。
「おぉ！」
　思わず声が出た。
「いろは特製の半熟ふわとろオムライスです！」
　ものすごく美味そうなオムライスがいい匂いをして待っていた。
「一色…お前料理できたんだな」
「私はもう、隠さずに正直に話します」
「ん？」
「先輩に…食べてもらいたくて…料理勉強しました…／／」
　可愛いかよこいつ…俺が元のサイズでこれ言われたら多分死ぬ。ほんと可愛い子がこんな言うとか…俺殺される。
「お、おう俺の為に…そのありがとな」
「！…／／　はい！」

「とりあえず、冷めないうちに食おうぜ」
「そうですね！」
「「頂きます」」
「先輩！はい！あ～ん♡」
「自分ｄ…」
「むぅ」
「はい…パク」
　まじのふわとろだ。まじで美味い。毎日食える。食レポ下手ですまんな。この表現でどのくらい美味いか想像してくれ。
　そして自分のスプーンでもう一度食べる。
　このふわとろ半熟玉子とケチャップライスが合いすぎて、スプーンが止まらない。
「どうですか？聞くまででもないと思いますけどね～」
「凄い美味い…店出せる」
「嬉しいです！ちなみに…お米ちゃんと私どっちが上ですかぁ？」
　凄い圧が…
「ノーコメントで」
「むぅ…良いですも～ん！即答してくれるまで料理の勉強頑張りますも～ん」
「でもな」
「？」
「お前の手料理、そのなんだ？めちゃくちゃ美味いぞ」
「も、もう…最初からそう言えば良いんですよ！／／」
　また食いたいレベルで美味しかったです。
　食後、食器も洗い、シャワーも浴びた。勿論１人で入りました。
　あとは寝るだけだな…
　しまった。自分のシャツを脱いだまま脱衣所に置き忘れた。一色はまだ風呂入ってるだろうし急いで取りに行かないと…
　ガチャ
「ひゃ！」
「あっ…すまん」

「あっ…その…これはちが…」
ガチャ
俺は何も見なかった。一色が俺の脱いだシャツに顔を埋めていたなんて…オレシラナイコレハユメ
寝室にて、
「その、なんだ…俺が悪かった…ノックせずに入ってしまったから」
「いえ…私が悪いんです…／／／」
「その…シャツの件はいいから…うん」
「はずかしいですぅ」
いや…なんでか悪い気はしないな…もうやだ俺…大丈夫か？
「その…悪い気はしなかった…うんしてないから安心しろ…全然気にしてないからな…な？」
「ほ、本当ですかぁ？」
「あ、あぁ！安心しろ」
「先輩」
ガバッ
「はっ…いっ…しき？」
「私…絶対に先輩をゲットして見せますから…見ていてくださいね！ファーストキスも私が貰いますから！」
「ちょ、何言ってるんだ…急に…」
「私、頑張りますから！」
その目は本気だった。いつものあざとい系の後輩ではない。本物の一色いろはだった。一色は「はっ！」という顔をして、俺の腕を離した。
「す、すみません…」
「気にすんな…その、お前の気持ちは伝わった、もう少し選択の余地をくれ…お前らと向き合わなきゃならん」
「どんな返事でも、受け止めてみせますし返事を待っています…いつでも」
俺は、ちゃんと答えを出せるのか…いつも自分が犠牲になる方法でしか解決してこなかった。だが今は違う。俺は姿になってしまった

が、心は比企谷八幡だ。
「でも…元のサイズに戻ったらかっこよすぎて目を合わせられないかもですぅ…」
「それはある意味俺が泣く…記憶飛んでたら勘違いして泣くやつだ」
「そ、そしたら頑張ってもう一度猛アタックします！」
「お、おう…」ポリポリ
　こんなこと、非現実的だ思うだろ？でも違うんだな。ソースは俺。こうやって関わっていくうちに…色々知れて良かったと思っている。まぁ戸部とは仲良くなりたくないがな…戸塚ともっと仲良くなりたい。
　人生、捨てたもんじゃないのな
　続

7話

朝の7時に目が覚める。今日も学校があると思うと、行きたくない気持ちがいっぱいです。
「せぇんぱい！おはようございます！」
「おう」
既に朝食は出来上がっていた。
「すげぇな…なんかありがとう」
「いや～それほどでもぉ～、今日は雪乃先輩の日なので…今のうちに先輩養分を吸収しとかなきゃ！」ギュー
朝から抱きしめられる俺は…寝起きだからか、抵抗できなかった。
「め、飯冷めちまうぞ」
「むぅ…しょうがないですねぇ～」
一色は自分の椅子に座り、互いに手を合わせて合掌する。
「「頂きます」」
一色の飯は相変わらず美味かった。
それに、俺のために作ってくれてるって考えるだけで照れる。
身支度を済ませ、俺と一色は学校へ向かう。勿論、手は繋がっている。
「先輩…今日も可愛いなぁ～」
「やめろ、照れるだろ」
「もうそこが可愛いんですよ～！今なら口説いてもフラれないと思いますよ～？」ニヤニヤ
今回のは本気だ。まじでいつものあざとい後輩はもうとっくにいなくなっていた。
「まだ…な」
「待ってますからね！」
「待ってますからね！」この言葉の重さを今になって感じている。受け入れると言っても、やはり苦しくなるのは確定事項だ。ソースは俺。
……

雪ノ下家
朝の４時。
「こことここは大丈夫…」
今日は比企谷君が、私の家にやって来る。泊まりで…
「…／／／」
そのため、掃除は徹底的にする。いつもの倍はする。比企谷君の好きな文庫本もいくつかテーブルの上に置いておく。これで準備は完璧。
「私も、あの２人には負けたくないですもの…負けることが許されない…」
ただ、最終的に私達３人の中から選択するのは比企谷君本人。どんな答えだろうと、受け入れる。すなわち負けを認めるって事、初めての敗北。せめて悔いのないように…
「比企谷君…私は正直者じゃなかった、私は…いえ、私達は自己犠牲を負いながらも助けてくれた貴方に惚れた」
捻くれて、目が腐っていて、いつも屁理屈ばっかりで、自己犠牲ばかりの貴方に…
私は惚れた。
……
学校に早めに着き、俺はいつも身を潜めている奉仕部の部室に入る。時間も早いということで一色も一緒だ。
「少しでも一緒にいたいので…」
「そっそうか」
そして暫く俺に抱きついたまま、沈黙の時間が続く。そうしてる間に朝のＨＲの時間が迫ってきた。
「そろそろ行きますね」
「おう、昨日はありがとな」
「いえいえ！私も楽しかったです！では！」
一色はそう言い、部室を後にした。
「平塚先生は出席にはしてくれるらしいから自由時間だと思ってウキウキだったんだが、読書もなんか集中できないな」

やはり、まだ答えは決まらない。結局２人が傷付くのは確定。フッたら３人が傷付く。昔の俺ならやりかねないが…あいつらの本気を見ちまったからな…

考えれば考えるほど…難しい。

放課後になり、ドアをノックする音が聞こえた。

「いいぞ」

「こんにちは」

雪ノ下は少し緊張しながら部室に入る。

「緊張するの珍しいな…」

「当たり前でしょ…は、初めて、好きな人を自分の家に泊まらせるのだから…」

「そ、そうだよな」

改めて、「好き」って言われると恥ずいな。

「そろそろ行くか」

「えぇ、そうね」

少しテレテレしてるテレのん可愛い。いかんいかん。理性よ…耐えろ。

「少し行きたいところがあるのだけれど…付き合ってくれるかしら？」

「行きたいところ？」

「えぇ…」

本郷三丁目。千葉からまぁまぁ離れた所にある。上野から歩いて１５分～２０分ちょい。

「本郷なんて始めて来たわ」

「そうね…私も来るのは始めてかしら」

「方向音痴にはなるなよ…」

「なっ…コホン、私は方向音痴じゃないわよ」

「じゃあ上野は何処だ？」

「あっ…えっと」

雪ノ下可愛いすぎだろ！

「と、とにかく、私は方向音痴じゃないわ…」

「はいはい」
ツンデレからツンを抜くと、ここまで変化するんだな…デレのん…うん、いい響きだ。
「と、東大か」
雪ノ下が行きたい場所は、東京大学の本郷キャンパスのようだ。
「一応、第一志望だから…建物の位置を把握しておこうと思って」
「なるほどな…いい所だな」
過去に戻ったみたいだ。歴史ある建造物を見ると、「俺、もしかして、前世で見たことある？」って思えて楽しい。
「そっか、雪ノ下は東大文系志望だったっけ」
「そうね、今のところは第一志望よ」
「流石雪ノ下だな」
「そ、そんな事はないわ…」
東大か…考えた事ないな。私文志望で、将来の夢専業主婦の俺にとっては天と地ほどの差がある。
そして、敷地内を探索する。
「チラッ　チラッ」テヲフリフリ
「(しょうがないな)」ギュー
「…!!」カァ
可愛い。いかんいかん…耐えるんだ。
「雪ノ下は学部…いや科類だっけ、どこ行くんだ？」
「そうね…文科一類かしら」
「つーことは法学部か、雪ノ下らしいな」
「そうかしら？」
「雪ノ下なら弁護士とかになれると思うぞ」
「あ、ありがとう…／／」
敷地内を探索して、休憩しての繰り返しで…久しぶりの散歩だったな。たまになこういうのも悪くない。普段家が俺の夢の国だったからな。
そして時間が経ち、いつの間にか夕方になっていた。
俺達は千葉に帰る。浮気してごめん。愛してるぞ千葉。

「今日は連れ回してごめんなさい」
「気にすんな」
「昨日の夕飯は何がいいかしら」
「カレーだな、気分的に」
「分かったわ、少し待っててちょうだい」
「手伝うぞ」
「大丈夫だから座っててちょうだい」
「お、おう」
　俺はソファに腰を掛ける。
「少し時間がかかるから、テーブルに置いてある文庫本を読んで待っててくれるかしら」
「おう、サンキュー」
　ソファで、テーブルの上に置かれてた文庫本を読んでいたら、カレーの匂いが俺の胃袋を号泣させる。
　暫くすると「出来たわよ」っと声が聞こえる。
「おぉ!」
　そのカレーは普通のカレーとは違った。
　カレーの上にハンバーグが置いてあった。しかもすげぇ綺麗に置かれている。
「より、凝ったものにしたのだけれど」
「これは…やべぇな　美味そうすぎる」
「ありがとう…／／／」
　雪ノ下も席に着き、「頂きます」の合図で、俺のスプーンが動き出す。
「パク」モグモグ
「ど、どうかしら?」
　ハンバーグとカレーがフィットしている。しかもハンバーグはジューシーでカレーはピリ辛。
「うめぇ」
「それは良かったわ…／／」
　これは癖になる味だった。
　俺のスプーンは止まらない。

「ごっそうさん、皿洗うからくれ」
「え？あ、ありがとう…でも貴方、椅子必要でしょう？」
「あっあぁそうだったな…やっぱこの体不便だな」
　雪ノ下の手伝いもあり、何とか皿洗いができた。せめて中学生くらいにしてほしかったな。
「その、お風呂はどうするのかしら？」
「あ～じゃあ先に入るか、シャワーだけだし」
「一緒に入る？」
「ブフォォ!!!」
　な、何を言ってるんですかね…この人は、
「そ、そのまだあの2人と一緒に入ってないでしょう？私が初めて…の…その…／／／」
「1回落ち着け」
「私は落ち着いているわよ」
　1回落ち着け、俺の理性。
「安心して頂戴、ちゃんと水着を着るわよ」
「あっ、まぁそれなら…まだ良いか」
「じゃあ着替えてくるわね」
「あ、あぁ」
　でも待てよ…俺はどうするんだ？

　何とか、見られずに済んで良かった。流石に下を洗うのは、雪ノ下はオーバーヒートしちまうからな。何とかなった。
「今日は疲れたし、そろそろ寝るか」
「そうね…久しぶりに遠出したから疲れたわ」
　電気を消し、ベッドに入る。
　てか、俺一色もそうだけど、一緒に寝るの躊躇してないな…何故だ？
「比企谷君」ギュッ
「うお!?ど、どうした？」
「私も一色さんみたいにき、キスしてもいいかしら？」

一色の奴…自慢したな…
「ま、まぁ一色にもされたし…頬になら良いぞ」
「そ、そう…じゃあする…わね…／／／」
雪ノ下の心臓の鼓動が激しくなっている。そして頬に柔らかい感触が…
「ど、どうだったかしら…その、初めてだから」
ちょっと、初めてとか言うんじゃないよ…意味深になっちゃうでしょ！
「やわ…柔らかいな…／／／」
こっちまで緊張してくるじゃねぇか…
「では…お、おやすみなさい」
「おう」
俺は今日寝れるんですかね…否、緊張して寝れないかもしれん。寝落ちするのを待つしかないのな。
翌朝、雪ノ下もあまり寝れてないのか…少し目を擦り欠伸をする。目の前に俺がいる事を忘れていたかのように、俺を見てすぐ照れている。
「そ、その…良く眠れなかったから…」カァ
「まぁな…俺も寝れなかったわ」
この間、数秒の沈黙が長く感じた。
「か、顔洗ってくるわね」
「おう」
雪ノ下は少し慌てながら洗面所に向かう。
そして俺は、昨日キスされた頬を撫でるように触る。
「一色のもそうだが…感触って残るもんなんだな」
……
メッセージのグループにて
「できたわ」
「雪乃先輩も出来ましたか～！」
「私だってヒッキーにき、キスするもん！」
「私はその上に行ったわ」

「なっ！」
「何をしたの!?ゆきのん!?」
一色さんと由比ヶ浜さんは、お互い声を上げ、私に問う。
「い、一緒にお風呂に入ったのよ…／／／」
「な、ズルいです！」
「私はまだチャンスがある！」
「由比ヶ浜さん、ちゃんと水着は着るのよ？」
「勿論！あっでもヒッキー大丈夫かな…」
ズキ…この一言で私は察した。私にはなくて由比ヶ浜さんにはあるもの…
「そろそろ切るわね」
そうして電話を切った。
「むぅ…」ペタペタ
唯一、姉さんの尊敬できるところよ。いつも誘惑して…許さないわ。
……
互いに、準備が終わり学校へ向かう。
「比企谷君…手、いいかしら？」
「お、おう…いいぞ」
雪ノ下と手を繋ぐ…前の俺だったら考えもしなかったな。
「…」チラ
「～♪」ニコニコ
まぁ、雪ノ下達が、そうしたいのなら俺は受け入れるしかない…な、もう3人の気持ちには気づいているわけだしな。
「(小さくなる前の俺なら、有り得なかったな…)」
傍から見たら、姉と弟である。小町と戸塚とも手を繋ぎたい。最近戸塚とも会えてないしな。部活が忙しいらしく…
学校に到着し、雪ノ下は俺を奉仕部に連れて…
「ま…また…」チュ
「お、おう…／／／」
身長差があるから、俺の目の前で屈んだ雪ノ下は…綺麗なお姉さ

んって感じだった。

俺はまた読書に集中出来ない時間を過ごす。

続

8話

結局、読書に集中すること無く、放課後になった。
だが由比ヶ浜が来ることは無かった。
「遅いな…」
そう呟いていると、
コンコン
ノックが聞こえる。
「どぞ」
「失礼するぞ」
平塚先生が部室に入ってきた。
「比企谷、お前は今あの3人の家に行き来してるようだな？」
「そうですね…親にバレるわけにはいかないんで」
「そうか、由比ヶ浜待ちか？」
「そうです」
「由比ヶ浜なら今日風邪で欠席してるぞ」
え、じゃあ俺今日何処で寝ればいいんだ？
「一応伝えといたからな、あとは君たちで決めてくれ」
「まぁそのつもりなんで」
そう言うと平塚先生はドアを閉めた。
由比ヶ浜に一応メールするか…
[お前、大丈夫か？]
とりあえず送った。多分寝てるだろうから、暫く待つか…まだ下校時刻には時間あるし…

暫くすると、メッセージが帰ってきた。
[ごめん…ヒッキー…風邪引いちゃったみたい]
[今から行くから待ってろ]
[でも移しちゃったら悪いよ…]
[気にすんな]
つーわけで由比ヶ浜の家に行くか…

ピーンポーン
ガチャ
「ヒッキー…来てくれてありがとう…ゴホッゴホッ」
「とりあえず寝てろ」
「うん、ありがとう」
「色々漁っていいか？」
「うん、いいよ」
由比ヶ浜は自室に戻っていった。
「さて、用意するか」
冷えタオルや着替えなどを自室に持っていく。
「邪魔するぞ、冷えタオル交換するからな」
「ごめんね…」
「気にすんな、昨日何やってたんだよ」
「ちょっとお風呂入ってからエアコンがついた部屋でゴロゴロしちゃったからかな…えへへ」
そりゃぁ風邪引くわな…まぁその気持ちは分かる。最近暑くなってきたからな。
「それに、薄着だったから」
「流石に寒いだろそれは…」
「ほんとね…」
まぁ、そうだよな。体温調節って結構難しいからな。エアコン消したら暑いし、つけたら寒いし…ほんと人間の体ってのはよく分からん構造してるわ。
「腹減ってるか？」
「ううん、大丈夫…今日お出かけしたかったなぁ…ほっぺにちゅーもしたかったし…／／」
「お前ら、さては連絡取り合ってたな？」
「バレちゃったか～w」
全く、どんだけ俺の事好きなんだよ。材木座が聞いたら俺殺されるぞ。あっ遊戯部の奴らにも殺されるかもしれん。
「全く…とりあえず寝てろ」

「ひっきぃ…傍にいてほしい…」ギュッ
「わ、わーったよ」ポリポリ
暫く時間が経ち、由比ヶ浜はぐっすりと眠っている。
時刻を見ると、もう夕方だった。
「んぅ…ヒッキー？」
「おっ起きたか、どうだ？」
「だいぶ、良くなってきた気がするよ」
「それは良かった」
由比ヶ浜は目を擦りながら、俺の目を見てお礼を言う。
「今日ありがとね…ヒッキー」
「まぁ、なんだ、前のお礼だ…俺に看病してくれたしな」
「すごいよね、先週はヒッキーで今日はあたしって」
ほんとだ。神は何を考えているんだ…八幡わからん。
「ヒッキー」
「ん？」
「好きだよ」
「…!?」
「いろはちゃんやゆきのんも言ってたかもしれないけど…私だってサブレを助けてくれた時から好きだったもん…」
「あれが出会ったきっかけだしな」
由比ヶ浜は軽く首を横に振る。
「出会った…じゃないの、私が会いに来たの…その時は本当に好きかどうかわからなかったけどね」
「…!」
軽くドキッとしてしまった。由比ヶ浜はずっと前から俺に恋心を抱いていた。それに俺は気付くことは出来なかった。こんな俺を好きになる奴なんていないと思っていたからだ。
「あのね…ヒッキー」
由比ヶ浜は真面目な顔をして…真剣な眼差しで俺に言う。
「あたし達は、ヒッキーがどんな答えを言ってくれるのか…考えてるの…3人ともフるのか…1人選ぶのか…ヒッキーは3人ともフ

るのも1人だけ選ぶのも躊躇ってる状態だと思う」
俺の思っていたことを当ててきた由比ヶ浜。俺の事を知らなければ分からなかっただろうその考察。
あの2人も同じ事を考えていたのだろうか…
「でもあたし達は受け入れるつもりなの…それだけは信じてほしいな、悩んでるのはヒッキーだけじゃなくてあたし達も同じなのは知ってほしいってか…もう分かってるよね、あはは」
今の由比ヶ浜の瞳は少し悲しそうで、不安で泣きそうな表情をしていた。
「俺は…」
[[俺は…本物が欲しい]]
今でも正直黒歴史なあの台詞。今でも思い出しただけで死にたくなる。だが、遂に本物を手に入れなければならない場面に遭遇したのだ。
コンセンサスしてくれる人はいない。俺のリリカルな感情を…あの3人のうち1人に言う。
だが、覚悟は出来た。
「1人に告白する事にする」
「そっか…頑張ってね！私達はいつまでも待ってるから！」
その言葉に俺はグッときた。生まれて初めての感情と言ってもいい。
「ちと、マッ缶買ってくるな」
「気をつけてね？」
「まだ夕方だから大丈夫だろ…」
外に出る。外は少し肌寒いくらいの気温で…火照った体には丁度いい気温だった。
「比企谷君～！」
ふと後ろから声をかけられる。
「なんすか、急に来て」
「ひゃっはろ～♪どうだい？ハーレム生活は」
「ま、まぁ良いっすね」

雪ノ下さんは相変わらずだった。
「真面目な話…薬を盛ったのは謝るけど、ちゃんと答え出すんだよ？」
雪ノ下さんは分かっていた。俺はあの３人に告白するつもりはなかったっと…俺が告るとか多分いじめ起きると思ったからだ。
美人で成績優秀でハイスペ雪ノ下。
可愛くてあざとい生徒会長一色。
誰にでも優しく接し、天然な由比ヶ浜。
３人とも…学校内の有名人だ。知らんけど…
でも俺は告白すると決めている。俺はあの時の台詞を実現すると決めたのだ。
「俺、覚悟できたんで…こんな体だからこそ、変われた自分がいるんで」
「よ！いい心意気だ！少年！なら私が言うことはもうないかな…じゃあね」（本当は私も好きだったんだけどね…譲ってあげる）
雪ノ下さんは俺に背を向け歩いていった。雪ノ下さんも何かを隠している気がした。俺に対する気持ちを…まさかな、勘違いだな。俺キモイ。
家に帰り、由比ヶ浜にポカリをあげて、由比ヶ浜はポカリをごくごくと飲む。結構寝てたから喉が乾いていたのだろう。
「ぷはぁ～生き返る～！ありがと！」
「おう良かったな、とりあえず風呂入ってきたらどうだ？汗かいただろ？」
「うん！そうする！」
すると、由比ヶ浜は立ち上がり、俺の目の前で服を脱ぐ。
「は？お前なんでここで脱いでんだ!?」
「え～、だってあの２人は見せてないでしょ？」
まぁ確かにそうだけど…いやだからって、
「あ、あたしだって恥ずかしいんだから…／／／」
由比ヶ浜は赤面しながら言う。じゃあ脱ぐな。俺が死ぬって。
「じゃあ入ってくるね！」
「え、あっおう」

見る俺だって結構恥ずいんだがな…
暫くして、由比ヶ浜は風呂から出てきた。
「さっぱりした～！」
「おう」
「そういえばヒッキー、ご飯どうする？」
「どうするか…なんかあるか？」
「あるけど」
そういや結構前に小町に作り方教えてもらった飯があるから、それ作るか…
「台所借りるぞ」
「え？うん」
その教えてもらった料理とは…「「野菜炒め」」
「お兄ちゃんは、どうせ一人暮らしとかしたらケチって食わないかサイゼ行くと思うから…サイゼより安く済むであろう料理教えてあげる」
「は？サイゼを馬鹿にするんじゃない…偉大なるサイゼ様を」
「いいから来て…」
「はいはい」
小町シェフのおかげで野菜炒めをマスターした俺は、素早い手捌きで作る。
「ヒッキー料理できたんだ」
由比ヶ浜は少し驚いた顔で言う。その後「むぅ」と言いながら、ソファに座る。
「何か手伝う事ある？」ムゥ
少し悔しそうにそう言う由比ヶ浜に、俺は…
「任せろ…俺の飯の方が美味い…専業主婦志望舐めんな」
「む！ひどい！ヒッキーのばか！あほ！ぼっち！」
めちゃくちゃ言われるですけど…八幡泣くよ…
「今はぼっちじゃねぇよ」
「…！」
「お前らがいるからな…／／」ポリポリ

今の俺は1人じゃない…流石に分かる。ぼっちを名乗れなくなってしまったのかもしれん。
「でもね…ヒッキー」
「なんだ…」
「その言葉嬉しいんだけどさ、椅子の上に乗りながら言うと…ちょっとカッコつけてる可愛い男の子みたいになってるよ」
「うるせぇ」
由比ヶ浜に言われるとは…少しばかり悔しく思ってしまうのは…俺だけか？
「由比ヶ浜、食えるか？」
「うん！お腹ぺこぺこだよ！」
皿に盛り付け、できたのが…
「八幡特製、小町監守のもと、野菜炒めです」
「何言ってるのヒッキー…」
由比ヶ浜が若干ヒッキーしてるけど、慣れてるからダメージはない。
問題は味だ。
「「頂きます」」
由比ヶ浜が箸で1口食べる。
「おいしぃ！」
「そらよかったわ」
雪ノ下達がどれだけ凄いのか、改めて実感した。そして努力する由比ヶ浜にも…
「お前も頑張ってるんだな」
「んー？」
「いや、料理な」
「そりゃぁ…ヒッキーには美味しいの食べて欲しいし…／／／」
3人とも俺のために頑張っている。それを聞くと、胸がザワつく。それなのに俺は3人の努力を知らずにここまで来た。これが…
「「本物が欲しい」」
なのかもしれんな。

食後、皿を洗い、やる事が無くなったので寝ることにした。
「ヒッキー、おいで？」
「いや、布団敷くから」
「あたしと一緒に寝たくないの？」ウルウル
「ぐっ、わかったよ」
こいつも最近一色みたいになってきたな。
「えへへ～」ギュー
「くっ…」（ち、ちちぃが！）
比企谷八幡。今日も寝れる気がしない。そろそろ熟睡したい。
……
数分前…
「体調は大丈夫？由比ヶ浜さん」
「うん！ヒッキーが看病してくれたから！」
「な！」
「羨ましいです…私も風邪引きましょう！」
「わ、私も…」
「あとね！ヒッキーがご飯作ってくれた！」
「いいなぁ…私も食べたいです！」
「そうね…私も食べてみたいわ」
あたしは思う。ヒッキーは誰よりも優しく、誰よりもあたし達を見てくれる。そんなヒッキー…いや、八幡に惚れたんだ。最初は八幡の事知らなかった。でも好き。だけど今は違う…本物の「好き」の意味を知ったあたしは…彼の事が頭から離れられない。
彼の「「本物が欲しい」」ってこの事なのかな…誰かを好きになる事が本物だとしたら…あたし達も手に入れちゃったかな…
「本当に好きになっちゃったのかな…」
そう呟きながらあたしは…彼の事を考え続けていた。
……
続

9話

チュンチュン

月日が流れ…1ヶ月過ぎた…のだが…

「あれ?おかしいな」

小さいままだ。

1ヶ月1日目である。

コンコンとドアをノックする音が聞こえる。

恐る恐るドアを開けようとしているのは…

「せ、先輩?」

一色は俺を見るなり…頭にはてなマークを付けている。気がした。

「多分今日戻る…」

俺が小さくなったのは上旬だった…だから今日戻ってもおかしくない…

「そ、そうですよね!今日…って先輩なんか少し大きくなってません?」

「は?どこが」

俺は素早く見た…でも違う、違って良かった。それよりも胴体が少し大きくなってる気がする。これは戻るかもしれん…

「とりあえず着替えるか…」

「じゃあ私はちょっと朝食の準備を手伝ってきますね!」

「おう」

どうやら、珍しく4人で食おうって事か…ん?待てよ…なんで一色がいるんだ?てか今何時だ…

ＡＭ９時半　土

この時間帯なら来てもおかしくないが、問題なのは小町と親だ。小町はまだいいとして、親がいるのは大問題なんだが…

俺はゆっくりと階段を降りた。

「あっお兄ちゃんおはよ!」

「こ、小町、親父達は?」

「仕事行ったよ?」

良かったァァ!!!多分バレてない。
「ヒッキーのお母さんとお父さん優しい人だったね！」
「そうね…／／」
「うぅ、あの八幡がなぁ泣」って言ってましたね！あれは正直面白かったです！」
あっこれ俺死んだ？バレた？
「小さくなったのはバレてないよ、良かったね！」
「まだマシか」
でも親にまで俺は孤独扱いされてたのかよ…小町がいるだろ。俺は小町がいるから…戸塚もいるから…
「とりあえず朝食食べよっか！お兄ちゃん！」
「えっあっあぁ」
「あっおはよう！ヒッキー！」
「比企谷君、もう少し早く起きてしいのだけれど…」
「おはようございます！先輩！」
「おう、おはよう…これでも早い方なんだけどね…」
親にバレず…何とかなったな。まぁうん…多分な…
「朝から豪勢だな」
雪ノ下と一色が2人で作った朝食は美味そうだった。
どうやら由比ヶ浜は米を炊いたたけだったようだ…
「「頂きます」」
美味すぎて朝なのに食ってしまう。てか小さくなってから食欲旺盛になったんだよな。
「先輩最近よく食べますよね～」
「確かに～！」
と言っても、言うほど変わらなくね？腹はよく減るけど…
「以前より食べるようになったと思うわよ」
「そうかぁ？」
やっぱり子供の姿だからなのかもしれんな…不便すぎるぞ…誰だ。若返りたいって言った奴…あっ平塚先生にも飲ませてあげて…雪ノ下さん。

「しかし…お兄ちゃん随分可愛くなっちゃって…」
「小町…俺は死ぬのか？」
小町に可愛いって言われるの初めてかもしれん…お兄ちゃんは嬉しいぞ。弟になっちゃったけど…
「お米ちゃん…」
「小町ちゃん…」
「小町さん」
3人は威圧的な眼差しで小町を見る。やめてあげて！俺の大事な妹！可愛い妹！
「やだなぁ～小町がお兄ちゃんに恋するわけないじゃないですか！」
ちょっと待て、兄妹だからって言っていい事と悪い事があるぞ。流石に傷つくぞ。泣くぞ。
「飽く迄弟ができたみたいだなぁみたいな事しか考えてませんって！3人の恋は邪魔しませんよ！」
「「…!!／／／／」」
3人とも顔が赤くなり下を向く。顔に出やすいのな…お前ら…
「まぁ～弟みたいで可愛いとは思いますよね～」
「それは分かります…後輩の私が言うのだから！」ドヤ
由比ヶ浜と雪ノ下は一色の発言に反応し…
「私達も同じだと思うのだけれど…」
「あたし達同級生だし！」
まぁ…同級生からしてみたらそうなるかもだけど、年下の方が力は上なんだよなこれが…
「年下…いやなんでもない」
つい口に出しかけてしまった。危ねぇ…
「ヒッキー？」ニコニコ
「比企谷君？」ニコニコ
「すみませんでした」
怖いよぅ…この2人怖いよぅ…あっ…良い事思いついた。
正直やりたくないが…気になってきた。今までいつも通りに接してきたが、もし本当に弟属性を発動させればどうなるか…

タイミングを…タイミングが大事だ。頑張れ俺。あんな黒歴史よりマシだろ？
「先輩をいじめないであげてくださいよぉ～！」
「そうですよ！私達より年上だからって」
「何を～！」
「聞き捨てならないわね…」
「「…」」ゴゴゴゴ
今だ！
「お姉ちゃん達怖いよぅ」
完璧だ。死ぬかと思ったもうやりたくない。声音も高くなってるし丁度いいだろう。
「「…??!!」」
どうだ！どうだ！勇気を振り絞った渾身の一撃！
「…？」
「か、可愛いですぅ…／／／」
「可愛い…／／／」
「可愛いわ…／／／」
「お兄ちゃんそれは反則…／／／」
自分で言っといてなんだが…めちゃくちゃ恥ずいな…／／／
正直言わなきゃ良かったが…小さくなる機会なんて滅多にこないからな…やって正解かもしれんな。知らんけど…はぁ
「も、もう1回言ってください！／／／」
「お兄ちゃん！」
「お願い！ヒッキー！」
「ひ、比企谷君…／／／」
「やだ」
俺はもう言わない。言わないもん。俺はもう言わない…何故なら弟は今日でおしまい！はいおしまい！早く戻してくれ…頼むって…
ピロン
「ん？」
雪ノ下さんからメールが来てた…まさか薬の効果1年とか言わな

いよな？頼みますよ？
［比企谷君やっはろ～、伝え忘れてたんだけどさ、薬の効果1年なんだよね…］
［はぁ？ちょっと待ってくだｓ…］
［うっそだよ～、今日の２１時だよ！何でだろうね！］
やはり俺はこの人が苦手だ。まじで死ぬかと思った。
［知りませんよそんなの…分かりました］
［じゃ…頑張ってね］
「…」
俺はその一言で救われた気がした。よく分からないが…そんな気はした。
「でさー！」
「ズルいです！」
「比企谷君も…」
あの３人のうち１人に…
「決断する時がきたって事だな」
俺は覚悟を決めた…だが流石に全員いる時に告白するってのはあれだしな…そういうのは徹底的に計画していかないといけない。
雪ノ下さんは２１時って言っていたな…まだ時間はある。
「なんか暇だな」
とりあえず…何とか時間を稼ぐ事を考えよう。
「そうですね～今日は土曜日なのでなんなら私とどこが遊びに行きますか？」ニヤニヤ
「は、反論は出来ないわね…」
「ぐぬぬ!!」
「小町は話がついていけてないです…」
「え、まぁそこは任せるわ…」
まぁ…なんだかんだあって…普通にゲームしたり公園で遊んだりすることにした。公園って…俺子供じゃねぇぞ。子供でした。ごめんなさい。
「なんか…今のお兄ちゃんが公園で遊んでるとか…可愛すぎませんか

ね」
「ヒッキーいつもヒッキーしてますからね～」
「ふふふ…ヒッキー…ヒッキーしてる…ふふ」
「ゆきのんが笑ってる！」
俺は子供…無邪気な子供。滑り台楽しいな。割とマジで…久しぶりに滑ると昔を思い出す。それはまだ俺が小学４年生の頃…
……
「お兄ちゃん…怖いよぅ」ウルウル
「安心しろ、お兄ちゃんが一緒に滑るからな」
「手、離しちゃダメだよ！」
「あぁ！」
「すごい！お兄ちゃん！私滑れた！」
「よしよし！凄いぞ！」ナデナデ
「えへへ！」
……
そんな過去もあったなぁとしみじみ思う。感動してます。お兄ちゃん嬉しいぞ。でもちょっと悲しい…もう一緒に滑ってくれないのか…
「…」ススゥ
１人で滑る滑り台…滑りまくった人生を変えたい。なんでだろう…少し寒くなってきたぞ。
「あっそういえば…お兄ちゃん！」トテトテ
可愛い小町が俺の所に走ってきた。どうしたんだろうと思い、立ち上がる。
「久しぶり滑ろう！今度は私が後ろね！」
おぉ…雪ノ下さん！ありがとう！俺は救われた。
だが雪ノ下達の反応は少しムッとしていた。
「久しぶり…に」
「むぅ…」
「ヒッキー」シュン

雪ノ下達をお構い無しに小町は俺の手を引っ張る。
ちょっもニヤけた面を見た雪ノ下達は、「し、シスコンめ…」
と呟いていた。何？俺が悪いの？ごめんね!?
これについては俺のせいですね。にやけたのは俺ですしね…そうです。千葉県の兄妹はみんなシスコン・ブラコンの集まりですよ。
「さ！滑ろ！」
「え？あっうん」
うん…嬉しいがめちゃくちゃ恥ずいな…
ススゥ…
「どうですか…久しぶりに妹と滑った感想は…」ムス
ムスっとしながら俺に感想を聞いてくる一色。
可愛いかよちくしょう。
「恥ずかったな…でもなんか悪い気はしねぇわ」
「相変わらず捻デレだね…ヒッキー」
「ほんとですよ…そろそろ素直になってもいいと思うんですけどね〜」
「それが比企谷君なのだから仕方ないことよ…」
雪ノ下には言われたくないんだがな…
あとドヤ顔するな…可愛すぎだろうがよ。
「俺は素直だぜ」
やべぇ滑り台楽しすぎる。
「写真撮っとこ…」
「同感ね」
「そうですね…」
「あ、あたしも…」
なんかカメラ音が聞こえる気がするのは気のせいか？
公園の後、ららぽに行くことにした。
「公園の後にららぽ…」
「いいだろ別に…ららぽは千葉の代表格だ…」
「えぇ…」
４人とも俺を見てヒッキーしてて…俺悲しい。

ごめん。なんか死にたくなってきた。千葉と死ねるなら…それでいいや…最近の俺はおかしい、まじで、助けて戸塚。
「ヒッキー！映画！面白そうなのやってる！」
「ほんとね…あれはパンさんの次に面白そうな映画だわ」
ほう、あれは確か小説にもあったな…え？映画化されてるのか？初耳なんですけど…知ってた。
「そういえばそれ、先輩の部屋にあった小説のやつですよね？」
「おぉ、お前読んでたのか」
「気になっていたので！」
まさか一色が、マニアック向けの小説を読んでいたのは…
「え～！なにそれ気になるじゃん！」
「今度私にも貸してちょうだい」
「おう、いいぞ」
なんか…悪い気はしないな…ポリポリ
「まだ16時か」
「そういえば21時でしたっけ？」
「あぁ」
時間経ったと思ったのに…意外と進んでなかったな。
さて、これからどうするか…
告白場所をどうするかを決めた方がいいな…どうするか…
「ヒッキー？そんな難しそうな顔してどうしたの？」
「ん？あぁいやなんでもない…」
「変な先輩ですね～」
告るとは言ったが…やはり今日告るって言うのは気が引ける。俺だから1週間も2週間も悩み続けるだろうとともわれてそうだからな。
ってか…こいつらはどう思ってるんだろうか…
……
先輩…今日はやけに大人しい。いつもだけど…
少し怪しいですね…今も難しい顔をして悩んでいましたし…もしかして告白の練習をしてるんじゃ…いやいや、先輩の事だから…で

も、もしかしたらっていうのを考えると、ドキドキして胸が熱くなってきますね。
先輩…待ってますよ！
……
……
ヒッキー、なんで難しそうな顔してるんだろ。悩み事かな、も、ももしかして、告白の準備とか!?はないか～。
ヒッキーだもんねぇ～もしかしてあたしから言った方が良いかなぁ…だめだめ！あたし、待つって決めたんだから！
……
……
比企谷君、何を考えてるのかしら…メッセージでやり取りした内容の事かもしれないわね。
私も待たなければいけないわ。
比企谷君には色々迷惑をかけてしまったわ。罵詈雑言も吐いてしまった…恥ずかしかったとはいえ、情けないわ…
……
やはり…お台場か？でも遠いな…夜も遅いしな…どうするか…
「先輩～！また考え事ですかぁ？」
「そうだよ！ごみぃちゃん。可愛い彼女達連れて、考え事とは小町は見過ごせませんよ？」
「へいへい…んじゃどこ行きますかねー」
本屋
「本屋ですか～」
「落ち着くぜ」
「同感ね」
「小町も料理の雑誌買っとこ～」
「あっ！サブレみたい！」
由比ヶ浜…君は天然なのか馬鹿なのかどっちなんだい？俺には分からんぞ。
まぁ…天然なんだろうな…ポリポリ

「先輩が言ってた映画のやつですよね？」
「あぁそれだ」
「新刊出てたんですか!?」
「出てるぞ」
　映画の内容って…どこまで進んでいるんですかね…ヘカーテルとクルーが探していた愛犬を見つけて大喜びするシーンとかあるのかな？結構感動するぞ？少年少女が泥まみれになりながらも、雨の中でも、大好きな愛犬を探すんだからな…物語自体は結構子供でも分かりやすいから、家族連れとかが多いのだろうか…
　「むぅ、ヒッキー！あたしにもおすすめの本教えて！」
「いや、お前は絵本からじゃないか？」
「あたしを何歳だと思ってるし！」
「比企谷君…貴方はどの文庫本を読むのかしら？」
「ライトノベルとかその辺だが…」
「成程ね…」
　もう今の俺には分かってしまうんだよな…ほんとモテ男は大変だな。葉山も結構頑張ってるんだな…
　べ、別に嫌だとかじゃないんだからね！勘違いしないでよね！っていうツンデレの代表的なセリフを自分で言うとか頭おかしいよな。
　こいつらとこうして出かけるのが楽しくなってきた。
　珍しいよな。引きこもってる俺が外に出るのが楽しいってな。俺も不思議だ。
　２０時
　俺もあと少しで元に戻るんだな。
「では！」
「またね～！ヒッキー！楽しかったよ！」
「また」
「おう世話になったな、気を付けて帰れよ」
「お気を付けて～！」
　それぞれ岐路に立ち、俺達も自宅へと歩む。
　少し早めに家に着き、ぶかぶかの私服に着替える。

「小町はもう気づいてるからね～」
「だろうな」
小町は壁に寄りかかり、ニヤニヤしながら言う。
「頑張るんだよ？逃げたら小町絶縁だからね！」
「え？酷くね？まぁ覚悟はできてるんだけどな」
「その調子だよ！お兄ちゃん！」
小町は公園まで着いてきてくれた。
理由は「こんなぶかぶかの私服着てるお兄ちゃんが歩いてたら不審者に誘拐されるでしょ？」ってな…
お前も誘拐されるぞ。可愛いから…
こう言ってるが、今すげぇ緊張してる…正直帰りたい。でも帰れないんだよな。絶縁されるから帰れないってのもあるけど…違うんだよ。俺の求めたていた「「本物」」がすぐそこまで近づいている気がしたんだ。
俺は公園に、中高浜公園に着く。
本当はお台場とかにしたかったがやはり時間的に無理だろうなと思ったからである。今日しか言えない気がしたんだ。許せ。
「じゃあ、小町は帰るから…んっと２０時５０分…そろそろ連絡したら？」
「あぁ、」
「頑張ってね!!」
「おう」
少し緊張をほぐすためにベンチに座る。
「ふぅ…」
緊張してるのは俺だけじゃない。
あいつらも俺以上に緊張しているはずだ。俺だけが挫けちゃ駄目なんだ。逃げるな、比企谷八幡。
「あぁぁぁ!!!くそぉぉ!!!それでも緊張するんだよぉぉ!!（小声）」
それでも緊張はする。手が震えるほどにな…
「ん？」
俺の体に変化が…身長が戻るのか…

「うわ、たっけ」
身長や声音が戻り、第一声が、「うわ、たっけ」である。
「反応薄くないですかね」
自分でも思った。てか自分で言ったんだ。
だが、正直今はそんなのを気にしてる場合ではない。
気にするべきだけども…連絡しなきゃだ。
俺は少し慌ててスマホを取り出す…
「ふぅ…」
俺は少し…深呼吸をして電話をかける。この少しの深呼吸が長く感じたのは初めてだ。
プルルルル
「…」ゴクリ
この呼び出し音の音を聴く度に、俺の心臓の鼓動は早くなる。
俺は…本物を手に入れなければならない。
「も、もしもし？俺だが…今中高浜公園にいるんだが、じ、時間大丈夫か？」
続

（続編）雪ノ下編

「も、もしもし？俺だが…今中高浜公園にいるんだが、じ、時間大丈夫か？」
「え、どうしたのかしら？さっき解散したばかりでしょう…」
俺は勇気を振り絞り言う。今にも泣きたいくらい緊張してる状態で…
「だ、大事な話がある」
「…！分かったわ」
それだけを言うと、電話を切る。
第1関門は突破したな。

暫くすると雪ノ下が歩いてきた。
「お、お待たせ。あら、本当に元に戻ってる…」
「おう、お陰様でな、あとそんなに待ってないからな」
「嘘よ」クスクス

少しの沈黙…そんな静かな公園の中、俺の心はうるさかった。静かにしてほしいくらいに…
「そ、それで話って何かしら？」
「あぁ、その事なんだがな…」
俺は今までに出たことのない声で…
「雪ノ下…俺はお前が好きだ…そ、そのなんだ？上手く言えんが、つ…付き合ってくれないか？」
「…」
雪ノ下は少しずつ俺に近づき、手をギュッと握りながら…
「遅いのよ…ヒキガエルくん」ポロポロ
「ナチュラルに胸にグサッてくるやつやめてね？緊張して告ったんだからな？」
ゴツ
「私もよ…私だって…ずっと緊張しながら待ってたのだから」ポロポ

ロ
「好きだ。雪ノｓ…雪乃」
「……！／／／　ええ、私もよ…は…八幡…／／／／」ウルウル
暫く雪ノ下が泣き止むことはなかった。だが…彼氏になった今…俺にしてやれることをやるだけだ。

「大丈夫か？」
「え、ええ…取り乱してしまったわ…」
「お前も号泣するんだな」
「だ、黙ってなさい！…／／／／」
俺は勇気を出して良かったと思っている。これが俺の求める本物ってやつだ。多分な…
「それより…八幡…」
「なんだ」
少し肌寒い中、手の温もりだけが感じるこの状況…俺はビクビクしながら聞く。
「貴方って人は…本当にどこまで優しいのかしら…」
「この方法の方が、誰も傷つかないだろ？だがよく考えてみろ、俺も傷つかない」
そう、まさにｗｉｎ―ｗｉｎってやつだ。
「今回は許してあげるわ…でも次からは私も…何かあれば手伝うから」ギュ！
「お、おう」ポリポリ
俺達は順調に続いている。雪乃の罵詈雑言は消えないが、相変わらず2人でパンさんの映画観たり、猫カフェに行ったりしている。たまに雪乃の手料理も食ったりしている。「美味い」って言うと顔を赤くする雪乃可愛すぎだろ。
月日は流れ、俺達は高3になり受験生となる。
「あちぃ」
今年の夏は特に暑い。こういう時は家にいたいんだが…何故だろう。

「夏休みなのに何で奉仕部活動してるの？」
　っと唐突に疑問に思っていたであろう顔をしながら、由比ヶ浜は喋る。
「確か平塚先生が…」
「平塚先生に言われてたな…」
　原因は平塚先生である。
　夏休みは課題が出される。高3は少ないが1年と2年は結構な量をこなさなければならない。そして、課題に困った生徒は、奉仕部に依頼をしまくる。
　普段は材木座とかしか来ないのに…平塚先生の影響で、ＰＣにわんさか依頼内容が飛んでくる。
「せ～んぱ～い！ここわかんないですぅ」
「あ～はいはい」
　よって受験対策との両立をしなければならない。
　平塚先生許さんぞ。だから今でも相手が見つからないんだぞ。
　職員室
「何か…癪に障る事を言われた気がするぞ…」（殺気）
「何故だ…少し寒いぞ」
「温度下げる？」
「あ、あぁ」
「いや～小町驚きましたよ」
　課題中にシャーペンをカチカチしていた小町がニヤニヤしながら言う。
「何が？」
「お兄ちゃんが雪乃さん…いや雪乃お義姉ちゃんと同じ大学に行くなんてね～！」
　俺は雪乃と同じ大学を第1志望にして、元々第1志望だった私立を第2志望にした。
　国立にした理由は、まぁ察してくれ。
「学費安いからな」
「うそつき～、一緒にいたいからでしょ？」

「ぐ、まぁな」
「八幡…／／／」
科類は違うがクラスは同じだからら一緒にいれるだろ。
「先輩は相変わらずツンデレですね！」
「ほんとほんと！ヒッキーはもう少し素直になってもいいと思うよ？」
「うっせ」
正直、素直になってるつもりなんだがな…
「話変わるけどお前らは進路決まったのか？」
「えっと、まぁ私立かな」
「私も私立文系にしますかね～」
「小町は国立受けようかなぁ～？」
小町は国立の怖さを知らないようだな…
「小町さん、国立を受けるのなら5教科7科目頑張るのよ？」
「私立にしようかなぁ～」アセアセ
「切り替えはえぇよ」
この何気ない日常もあと7ヶ月ちょいか…
由比ヶ浜達と別れ、小町と雪乃と一緒に歩く。
雪乃は少し照れながらも、俺の方に手を差し伸べてくる。それを俺が握ると少しビクッてするんだ。
俺も自分から握っといて、緊張しまくりである。
「先帰っといてくれ」
「ほーい、ちゃんと送るんだよ？」
「分かってる」
小町にも色々世話になったな。過保護すぎるんだよな。俺もだけど…
小町とも別れ、雪乃を家まで送る。
「八幡…」
「何だ？」
雪乃は俺の手を強く握りながら俺に言う。
「絶対受かろうね」

雪乃は優しく俺に囁く。
俺は首を縦に振り、
「勿論だ」
っと答える。
俺の答えはとっくに決まっていた。
雪乃と一緒に…合格を勝ち取る。
家に帰り飯食って、今日やった内容の復習をする。
やはり数学がムズい。文系科目ならある程度過去問で点数取れるが、配点が低いとはいえ点を取らなければいけない科目だ。
それに、1次試験で足切りしたら話にならん。
「やるしかないもんな」
黙々と問題演習をするしかない。
夏休みが終わり、俺の模試の偏差値は大分上がった。
夏の努力が報われた気がして、正直嬉しかった。
「その様子だと偏差値上がったみたいね」
いつも通り、放課後に部室に寄り、進捗を共有していた時だ。
「あぁ、雪乃のおかげで数学の偏差値上がったんだ」
「それは良かったわ」
雪乃のおかげで上がったようなもんだ。
頑張って目標点に到達するように日々勉強を怠らないようにしよう。
「ヒッキー凄い！」
「由比ヶ浜も大分伸びてんじゃねぇか」
由比ヶ浜も一緒にやっていたからか偏差値が上がっていた。
「結構解けるようになってきてるわよね」
「うん！ゆきのんのおかげだよ！」ギュー
「ゆ、由比ヶ浜さん…暑苦しいのだけれど…／／／」
眼福ですな～
「しかしまぁ…俺が小さくなってから、色々変わったよな」
俺が小さくなり、雪乃達と一緒に住んでから、雪乃達も俺自身も、色々変わってきた気がする。まぁ最初の雪乃達には驚いたけど…

「そうね、小さくなってから私達も急変してしまったわね」
「ね！ヒッキー可愛かったから」
「お、おう」
改めて言われると恥ずかしいんだが…
だが実際、小さくならなかったらどうなっていたのだろうと考えると複雑な気持ちになる。
雪乃達が俺に好意を向けている事に気づかなかっただろう。そう考えると、雪ノ下さんは俺にチャンスをくれたのだろうか…あの人の考えは全く分からないものだ。
3年生になると結構暇な時間が増えるものだ。家帰っても、部室でも、勉強以外にやることが無い。
依頼もそんなに来ない。
「お兄さん、ここが分からないので教えて欲しいっす」
「お前のお兄さんじゃない、小町はやらんぞ。ここはだな…」
奉仕部には小町と川何とかさんの弟である大志が部員として入っている。
一色もサッカー部のマネージャーを辞め、生徒会長と奉仕部を両立していた。
一色曰く、「葉山先輩より先輩の方が好きになったので」らしい。
「お兄ちゃんのシスコンはいつになったら無くなるのやら…」
「お前もブラコンだろ？」
「ぐうの音も出ません」
小町も高校生になったが…去年と変わらなくてお兄ちゃん安心したぞ。
ガララ
部室に一色が入ってきた。一色の手には資料があった。
「先輩？」
「ん？どうした？」
「ここで作業やってもいいですか？」
そう言いながら、資料を机に置く。
「まぁいいと思うが…」

俺は目線を雪乃の方に向ける。
「…」コク
雪乃から許可を得た。
奉仕部も少し賑やかになってきた。
「あ～でけた～」
黙々と勉強やら作業を終えた俺達は息ピッタリ腕を伸ばす。
気づけば下校時間が迫っていた。
「じゃ～ね！」
「さようなら～」
俺達は解散し、家へと向かう。
「小町は先に帰るから…2人の時間をお楽しみに～」ニヤニヤ
小町は小走りで家に帰る。
「俺達はどうする？」
「ご飯でも…どうかしら？」
財布には少し余裕があるっということから、俺達はサイゼに向かう。やっぱりサイゼが安定。
席に着き飯を頼み…少し喋る。
何気ない時間が楽しく思えた。こういう時間を大切にしていきたい。
「八幡が小さくなった時は驚いたわ」
「だよな、俺はもだよ」
俺が小さくなった時の話を掘り返す。
この非現実的な出来事のおかげで今の俺達の関係がある。前にも思っていた事だがな。
「姉さんはよく分からない人よ」
「だよな」
「まるで私達の感情を読み取っていた様な素振りを見せてきたのだから…きっと姉さん本人だって、」
雪ノ下さんは自分より妹や妹の友達を優先したってことになる。正直怖い人だと思っていたが、本当は優しい人だったのだろう。
「でも姉さんのおかげなのかもしれないわね」

「まぁ、俺が小さくなっていなかったら決断なんて出来ないからな…」
「そう、貴方は自分の事より相手の事を考える人、だから自分が傷ついても気にしない、私は嫌よ…貴方に頼ってしまったばかりに…貴方にだけ大変な思いをさせてしまった自分が許せない」
確かに、文化祭や修学旅行のときは大変だった。
だが今更気にする事はない。俺がやりたかったんだ。
誰も巻き込むことをせず、解決する方法を知っていたのは俺だけだ。
「でもまぁ、もう過去の事だ…」
だが、大事な人ができた今、俺はその方法をやろうという思いはない。自分と一緒に協力してきた者たちも傷つくからな。
「俺はもうぼっちじゃなくなっちまった…だからもうやらねぇよ」
「信じる…今の貴方を、私の大事な人を」
その言葉に少し照れてしまった。
雪乃は少し笑い、席を立った。
「そろそろ、行きましょう?」
俺も席を立ち御会計を済ます。
雪乃と手を繋ぎながら…
「あと少しで受験だな」
時間が経つのは早かった。
あっという間の1年だった。
「少し、寄りたい所があるのだけれど…時間大丈夫かしら?」
「あぁ」
そこは公園のベンチ。
俺も少し休みたかったから丁度良かった。
「八幡…」
「ん?」
チュ
「……!?」
その一瞬…数秒の時間、唇に柔らかい感触が残っていた。
「え?」

「ファーストキスよ…冬にはピッタリじゃないかしら？」
季節は冬。この日はクリスマス・イブ。勉強が忙しくて気づかなかった。
「クリスマスにはピッタリだったな」
「そ、そうね…本当はイルミネーションがある所に連れて行きたかったのだけれど、場所が分からなくて…／／／」
方向音痴を発動させた雪乃の照れ顔は、いつもの照れ顔とはまた違う表情をしていた。
「来年は2人で行こうな」
「そうね」
こうして、高校最後のクリスマスは終わる。
受験当日…
「お互い頑張りましょう！」
「おう！」
何とか1次試験を突破した俺達は、2次試験を今から受ける。今までの努力を今ここで発揮する時だ。
……
1ヶ月ちょい経った今日。
俺と雪乃は大学のキャンパスに向かう。
「さ、探すぞ」
「えぇ…」
お互いに緊張して、開示された場所へ向かう。
「では…また後で」
「あぁ」
指で数えながら一致する番号を探す。
「あった…」
横を見ると、雪乃も驚いた表情をしていた。
俺に気づくと、小さく丸のサインを出した。
俺達は受かったのだ。
「努力が報われたな」
「そうね」

俺は雪乃を抱きしめていた。
「ちょ、ちょっと…恥ずかしい／／／」
「ありがとな」
雪乃達と頑張ったおかげだ。
由比ヶ浜達も第1志望の大学に受かっていたらしい。
小町は泣いていた。
「お兄ちゃん…おめでと！」ポロポロ
「泣くほどじゃないだろ…まぁ、ありがとな」ナデナデ
「八幡！すごいね！」
「ハチマーン！貴様小さくなったからリア充になったのか！羨ましい！」
「ありがとな戸塚、お前もおめでとう」
「ありがとう！」
「ハチマーン！我も！我も！」
「はいはいおめ～」
「適当すぎ！」
たまにはこういうのも悪くは無いな。
「先輩！おめでとうございます！」
「おう、ありがとな」
「僕も頑張るっす」
「小町と同じ大学は受けんなよ…小町はやらん」
「お兄ちゃん…シスコンにも程があるよ」ポロポロ
「千葉の兄妹だからな…ほれティッシュ」
「ありがと」
「八幡」
雪乃に名前を呼ばれたので俺は横を向く。そして感じた事のある柔らかい感触が唇に…
「!!!」
「裏切りものぉぉぉ!!!八幡のバカァァ!!」
「中二うるさい」
俺は咄嗟に顔を隠す。今の俺は赤くなっているだろう。

「これからもよろしくね、八幡」
「おう」ポリポリ
皆んなに見られてるのに、雪乃も大胆になったな。
「ゆきのん羨ましい、でも幸せそうで良かった！」
「私達の負けですかね…お幸せですよ！」
「あぁ…」
雪乃の顔を見ると、雪乃自身も赤面させながら顔を隠す。でも微笑んでる姿を見ることができた。
「八幡を傷つけさせたりはしないわ…根暗で捻くれているけれど…」
「久しぶりに聞いたな、八幡メンタル弱くなってるんだが」
「それでも、貴方が好きよ。八幡」
「おう…俺も、好きだ」
俺はもうぼっちじゃない。周りに仲間ができた。
そして、雪乃は俺のパートナーになった。
ありがとう。こんな俺を好きになってくれて…これからも宜しくな。
雪乃。

（続編）由比ヶ浜編

「も、もしもし？俺だが…今中高浜公園にいるんだが、じ、時間大丈夫か？」
「ん？どうしたの？ヒッキー？」
深呼吸…俺はここで逃げるわけにはいかない。
「大事な話があるから…来てくれ」
「…！すぐ行く！」
っと言い、電話が切れる。
「頑張ったぞ…俺」
そう自分に問いかけながら、由比ヶ浜を待つ。
しばらくして「ヒッキー！」という掛け声が聞こえる。
「おう、来たか」
「おまたせ！ヒッキー」
ちょっと息切れする由比ヶ浜を落ち着かせ、少し時間を置いてから本題に入る。
「あのな、看病してくれた時あったろ？」
「う、うん」
「そん時からかお前に意識するようになったんだよな」
「うん、え？…それって」
「あぁ、まぁつまりだが」
俺はこの一言で…集中力を最大限まで…
「好きだ…付き合ってくれないか」
すると、由比ヶ浜の目から涙が零れる。
「遅いよ…ヒッキー」ポロポロ
「由比ヶ浜…？」
ダキ
俺の体全身に柔らかい感触を感じる。そして由比ヶ浜の泣く姿。
いつもなら振り払うが…できるわけないだろ。
「待たせたな、由比ヶ浜」
「違う…」ポロポロ

「ん？」
「結衣って呼んで」
まぁ俺はたった今、由比ヶ浜の恋人になったからな…しょ、しょうがない。
下の名前を呼ぶのは小町だけだったから物凄く緊張した。由比ヶ浜の上目遣いに負けてしまった。
「ゆ、結衣…／／／」
俺は噛みそうになる舌をどうにか抑えて名前を呼ぶことができた。
「えへへ…／／／」
彼女は少し嬉しそうに…自分のお団子を弄る。
俺は多分、赤面して上手く会話することは出来ないだろう…。
由比ヶ浜を直視する事が出来ないのが物語っている。
「私もさ…これからは名前で呼ぼうかな…／／／」
「お、おう」
「八幡…これからよろしくね！」
彼女のその笑顔は…今まで見てきた笑顔とはまた違う笑顔のように感じた。
「あぁ、よろしくな…結衣」
やはり、名前呼びは慣れないものなんだな…
付き合ってから、結衣は母親と料理の練習をしているらしく、最近は弁当を作ってくれるようになった。中々上達して、今では普通に食ってる。
最近は2人で遊びに行く事も多くなってきた。家デートでもいいんだが、結衣は外であそびたいらしく、結構振り回されている。まぁ楽しくないわけではないけどな…
そして、あっという間に月日は流れ…俺達は進級し高3になった。
「ヒッキー！一緒に帰ろ！」
高3の夏。今年の夏は猛暑で毎日ヒッキーしたいくらいだった。
あっいつもか…
「おう、今日はハニトーいいのか？」
「暑いから食べる気分じゃないんだよね…あはは」

やっぱりいつもの呼び名がいいということで、俺はまたヒッキーと呼ばれる事になった。ヒッキーって引きこもりのヒッキーって意味かと最近思うようになった。だって小町が言うんだもん。俺のせいじゃない。

「だよな、アイスでも食いに行くか？」

「うん！行こう！」

こんなに暑いのに…俺達は手を繋ぐ。お互い汗をかいていて、少し照れながらも手を離さない。

「最近暑いね～」

結衣は手をパタパタさせながら言う。

「だな…今年は去年より気温が高いらしいぞ」

「えぇ!?まじ!?」

こういった日常会話が楽しい時間になった。

ぼっちだった俺には夢のような日々を送っている。こんな俺に寄り添ってくれる仲間ができた事で俺は変われた気がする。本物を手に入れた…と信じる。

「てか、アイスはどこで食うんだ？」

結衣は少し照れながら、俺の前に立つ。

お団子頭を撫でながら、ニコニコしている。

「ヒッキーのお家、行きたいな」

「…／／」ポリポリ

そういや、俺の家に来るのは久しぶりだったか、

彼女とはいえ…いや、彼女だからこそ家に招き入れるという事に、色々考えてしまう。

決してやましい気持ちがあるわけてはない。本当です。男の子だからといってそんな事考えない。嘘です。小さくなった時とかめちゃくちゃ緊張しました。ごめんなさい。

「お、おう」

情けない声で返事をする。

俺の頭の中何を考えているのか、自分自身にも分からない。ただ涼しい部屋でアイスを食いながら駄べるだけだ。何も考える必要はな

い。
「じゃ、帰りにスーパーかコンビニ寄るか、アイスがないんだわ…」
小町が全部食ってしまったからな。
「うん！」
相変わらず元気な声で返事をする結衣は、とても可愛く思えた。
家の近くのコンビニでアイスを買い、家に入る。
家には小町もいない、親もいない。つまり、２人っきりの状態である。部屋で２人っきりってだけで緊張してしまうのは初々しい証拠なのか…
俺だけではなく結衣も少し赤くなっている。熱中症かと思うくらいに…
「涼しい～!!」
エアコンを付けて涼しくなった部屋に座り込む俺達。
だが帰ってきた時は汗だく状態。
風邪引かないように気をつけないといけない。
「風邪引かないようにな」
「は～い！」
俺も結衣もお互いを看病した仲だ。ほんとあの時は奇跡？なのか知らんが、風邪を移した割にはタイムロスが生じる。一体何だったのだろうか。
「ヒッキーは大学決まった？」
「あぁ決まったぞ」
「あたしもヒッキーと同じとこにしたいなぁ」
俺が受験する大学は私立の中でも難関とされる大学。
３教科とはいえ難しい。俺は模試でＢ判定しか取れなかった。
「教えてやるよ」
「本当！ありがとう！」
俺も正直結衣と一緒にいたいからな。べ、別に離れて寂しいとかないんだからね！勘違いしないでよね！
鞄から教科書とペンケースを取り出した結衣はガッツポーズをし、教科書を開く。

俺は古文の参考書を取り出し、問題を解く。
数学をやらなくていいのは便利だ。
ちなみに俺が受ける大学は第一志望を3学部、第2志望1学部。
商学系と文学系と社会科学系を受ける予定だ。
「結衣は学部決まったか？」
「うーん…あたしは教育系に行こうかな」
俺達が受ける大学は学部が別でも同じ講義を受けられるらしいから、受かりやすさを考慮した方がいいか。
「そうだな」
「勉強頑張ろ！」
結衣は春から俺と勉強してきたため、偏差値は少しずつ上がっている。このまま頑張れば受かる可能性はある。
「お前成績は上がってるからな、行けると思うぞ」
「ありがとう!!頑張るね！ヒッキーも頑張って！」

互いに同じ目標。
モチベーションが上がる。
ガチャ
「あれ？お兄ちゃん帰ってきてたの？」
「おう小町」
「やっはろ～！小町ちゃん！」
「結衣さんやっはろ～！」
やっはろ～一族は里を追い出されたはず…と頭の中で某漫画とコラボさせている俺は間違っているのだろうか。くだらない事を考えてしまった。
夏休みは勉強やデートをしたり、充実した夏だった。いつもの俺ならお家でゲームしたり読書してるはずだが、やっぱり結衣と一緒にいるのは楽しいんだよな。
夏が過ぎ、普通に学校がある平日。
相変わらずの日々。戸塚は可愛い。結衣も可愛い。最高である。
だがそれ以外はぼっちと変わらない。

てか関わりが少なすぎるって事だが…
放課後になり奉仕部へ向かう。
「ヒッキーここ分かんない…」
「漢文か」
最近依頼は来ない。材木座も受験するんだろうか、執筆をたまに本人が来る。
「ハチマーン！ここ教えてくれ！」
「うるせぇ…ここはな」
材木座も社会は出来るから意外と凄い。たまにすごい。
「由比ヶ浜さんそこ間違ってるわよ」
「えぇ！まじ！」
国立理系志望の雪ノ下がめちゃくちゃ教師っぽい事をしている。
ガララ
「先輩～今お時間よろしいですか？」
一色が書類を持って部室に入ってくる。
「生徒会の手伝いなら出来ないぞ」
「あっいえいえ、確認だけしてほしいなって！」
「おう、ならいいぞ」
一色も最近は小町達と一緒に生徒会を頑張っているらしい。八幡は嬉しいぞ。
書類作成も上手くなっているし…
生徒会長としての威厳を保っている。
「えっへん！」
俺が褒めるとドア顔をしてえっへんポーズをする。
「頑張ったな～」ナデナデ
「…！／／／／」カァ
おっと癖が…
小町にいつも撫でてるから癖がついちまった。
「むぅ！ヒッキー！あたしも！」
「お前はいつも頑張ってるな、偉いぞ」ナデナデ
「えへへ、好きぃ」

「ぐふぅ」
材木座が死んだ。
「比企谷くん…私もいいかしら」キリッ
小さくなったおかげでハーレムってか…どういうギャルゲ？
「勉強できねぇ」

秋模試が終わり、自己採点をする。
「お、記録更新だ」
目標点を大きく上回った。
志望校に少しずつ近づいてきた気がした。
緊張が解れ、ふぅっと息を吐く。
「ヒッキー！」
少し騒がしい教室の中で結衣の声がハッキリと聞こえた。
なんで教室かって？秋模試終わって自己採点する気力がなかったので教室で自己採点をしていた。
睡魔には勝てないんだよ。許せ。
「おう、結衣はどうだった？」
「目標点超えたよ!!」
どうやら結衣も点数が安定しているらしい。
まさか結衣がちゃんと勉強できるようになったとは…教えた甲斐があったってもんだな。
「この調子でやっていこうな」
「うん！あとさ…」
結衣は顔を赤くし、体をモジモジさせながら…お団子頭を撫でる。
結衣の癖なのかっと疑問に思いながら、話を聞く。
「いつもみたいに…その、撫でて欲しいな！」モジモジ
最近結衣が成長する度に撫でている。それは結衣のモチベーションを上げる良い素材となっている。それが俺の手だ。ソースも俺。
「おう」ナデナデ
「えへへ～」テレテレ
リアジュウバクハツシロ

ウラヤマケシカラン
ボッチダッタクセニ
オシアワセニ
ボクモハチマンニナデテホシイナ
なんか周辺から睨まれてる気がするのは気のせいだろうか。戸塚…何回でも撫でてやるよ。
「じゃあちょっとお手洗い行ってくるね」
「おう」
結衣が席を立ち、教室を後にしたあと、葉山が近づいてきた。
「ヒキタニ君、どうだい？成績は」
「順調だ」
葉山は確か雪ノ下と同じ国立志望だっけ…
やっぱ勉強も運動もできる奴は違うな。
「結衣をよろしく頼むよ」
「唐突だな…」
「いや、君が変われた気がしたからね」
「まぁ、そうだよな」
俺は確かに変わった気がする。だが断言はできない。
また最悪な選択をするかもしれない。
結衣を悲しめる言葉したくない。結衣は俺を選んでくれた大事な人だ。
もう、後悔はしたくないからな。
「もう結衣達を悲しませたりしないでおくれよ？」
「当然だ」
葉山は微笑みながら頷き、グループの方へ向かう。
「復習するか」

時間の流れは早く感じる。
もうクリスマスである。外は雪が降っており家でカタツムリになっている小町とカマクラ。
俺は暖房が付いた部屋で過去問演習をしている。

クリスマス当日、結衣との予定が入ってなかった。
「そういや、連絡ないな」
いつもなら連絡してくれるはずだが、今日に限ってなかった。
「メッセージしてみるか」
俺は状況を把握するべく、[受験勉強どうだ?]っと送った。
それからしばらく経ち、携帯が鳴る。
[ごめんねヒッキー…風邪引いちゃったw]
どうやら風邪を引いたらしい。
俺は荷物の用意、着替えを済ませ…小町に一言入れてから家を出ることにした。
「ちと行ってくるわ」
「はーい、結衣さんとデート?」
「ん、まぁそんなところだな」
「楽しんでね!」
デートみたいなもんかな、俺が好きになったきっかけが風邪だからな。
「さむ」
外は凄い寒い。だが夏よりはいいな。着れば着るほど暑くなるからな。
地面が凍ってないおかげでチャリで結衣の家まで行くことができた。歩いて行くと時間がかかるからな。
ピーンポーン
結衣の家に着き呼び鈴を鳴らすと、結衣のお母さんが出てきた。
「あらヒッキーじゃない、こんばんは!どうしたの?」
「こんばんは、結衣…由比ヶ浜さんが風邪引いたとの事で、お見舞いに」
「あら!貴方もお見舞いに来てくれたの?ありがとうね!さっすが結衣が選んだ彼氏だこと!」
貴方も?雪ノ下も来たのか…
「ささ!寒いだろうから上がって!」
「お邪魔します」

結衣の部屋の前に立ち、ノックする。
すると咳払いをしながらでも元気な声で返事をする声が聞こえる。
「邪魔するぞ」
「え？ヒッキー？」
コンビニで買ってきたポカリとかを机に置き、結衣の傍に寄る。
「来てくれてありがとう」
「大丈夫だ」
結衣は少し笑顔を見せ、もう一度横になる。
「お前、もう平気なのか？」
「さっきゆきのんが来てくれたから、だいぶ楽になったよ！」
やはり雪ノ下が来てたのか。
「えへへ、なんか久しぶりだね」
「だな」
小さくなってた時も、こうやってお見舞いに来ていた。小さかったから看病するの苦労したけどな。
「ヒッキーも体には気をつけてね！」
「当たり前だ。ガハマさんみたいに風邪引きませーん」
「な!?なんだと!?風邪引いたらニヤニヤしながら看病してやるからね！」
結衣はムスッとしながら言う。そして少し微笑んだ。
「夜景が綺麗だな」
窓の方に目線をやると月がハッキリと見えた。
「だね…ヒッキー」
俺は結衣の方に目線を向けると…
微笑みながら俺の手を握り…
「受験が終わったらはいっぱい遊びに行こうね！」
「おう」
その後は由比ヶ浜家で夕飯をご馳走してもらい、帰宅する。ガハママさんがグイグイきて、結衣を嫉妬させてた。可愛かった。
3月
受験を終え、今日が合格発表の日だ。

「緊張するな」
「だね…」
平塚先生に許可を得て、部室で合格発表を見ることにした。
番号が出て、指でなぞりながら確認する。
「「あった」」
俺達の番号があった。
つまり合格したって事か…
「やったな！」
「うん！やった！」
共に第一志望の大学に合格した。
同じ大学に合格したのだ
「ヒッキー」ポロポロ
「あぁ」ナデナデ
結衣はこの1年間良く頑張った。俺が保証する。
険しい道だったが諦めずに勉強して、偏差値も上げ、見事現役合格を果たした。
「ヒッキー」
「うぉ？」
結衣の手が俺の頬を挟む。
結衣は緊張がしながら俺に顔を近づける。
チュッ
「えへへ」
「…」ポリポリ
照れ隠しなのか、俺は何も言えなかった。
「やっとちゅーできた！」
「急にするなよ…心の準備ってのがな…まぁ、嬉しいけどよ」
「相変わらずツンデレなんだから～」
結衣のニヤニヤした顔を見るのは何回目だろうか、見慣れた顔なのに…ファーストキスを取られてから、その顔を見ることができない。
今の自分の顔が情けない顔をしているのは自覚済みだ。
「これからもよろしくね！八幡！」

「あぁ！」
俺と結衣の関係を無くしたくない。
そう思いながら結衣を抱きしめる。
やはり俺がリア充になるは間違っていなかった。

（続編）一色編

「も、もしもし？俺だが…今中高浜公園にいるんだが、じ、時間大丈夫か？」

すると、少し震えた声で一色は言う。

「大丈夫です！急いで行きますね！」

察しているのか…それとも嬉し涙を流しているのか…

俺は色々考えながら…ベンチに腰をおろす。

少し時間経つと、俺の名を呼ぶ声が聞こえる。

「先輩！」

その声はいつものあざとい一色ではなかった。

「おう、解散したばっかなのに呼び出して悪かったな」

「気にしないでください！それよりお話って何ですか？」

少しウキウキしながら一色は言う。察しているのか？

と俺は考える。

「いや…そのな…」

一色は真剣な眼差しを俺に向ける。俺より背が小さいため、少し上を向いている。

いつもの俺ならキョドるが…今はキョドるわけにはいかないのだ。

「なんですかぁ？」

言い方はあざとい…だが目を見れば分かる気がする。一色の目は優しかった。

何故か知らんが勇気が出た気がする。

「その…な？俺は正直、一色といる時間が楽しかった…デート？に誘われたり、仕事押し付けられたり、面倒くさかったが、中々楽しかった…」

「はい…」

「俺はもしかしたら…お前にずっと振り回されたいのかもしれん、一色は俺の事前から好きだったんだよな？」

「勿論です…」

それに気付くことが出来なかった。俺は馬鹿だったのだ。

俺は思っていた事を話す。
それでも一色は最後までちゃんと聞いてくれている。少し涙を出しながら聞いてくれている。
俺は勇気を振り絞った。
「一色」
「はい」
「俺と付き合って欲しい」
一色は我慢の限界だったのか…声を出しながら、
「待ちくたびれましたよ！」ポロポロ
俺の胸で大きく泣いた。俺は抱き締めることしかできなかった。
少し落ち着いたところで、マッ缶を買い、一色に渡した。
「落ち着いたか？」
一色はムスッとした顔で…
「はい、もうちょっと告白が早ければなぁ」
っと文句を言う…
俺にだって心の準備が必要なんだよ。折本の時なんか死ぬかと思ったからね？もう告白なんかしないから！って思ってたけど…人生で2回目の告白って事ですかね。
「でも…嬉しいです、私を選んでくれて…」
一色は少し微笑みながら口にする。
安心したのか背伸びをし、欠伸をする。それほど緊張していたのか、少し疲れている様子だった。
「家まで送るぞ」
「お願いします！八幡先輩！」
「い、いろは」
「告ったばかりなのにいきなり名前で呼ばれると、お家に帰っても嬉しすぎて寝ることができなくなるので少し時間を置いてから言ってくださいお願いします」
「じゃあ一色」
「…やっぱりいろはがいいです」
「いろは」

「／／／」カァ
何度も言わせるな…恥ずいだろ。

告白から時間が経ち、俺達は進級した。
いろはは相変わらず生徒会の仕事を俺に頼ってくる。
まぁ受験に関してはそれなりに余裕があるから問題無いからいいんだけどよ。
夏休み…
いろはは俺の家に上がり込み、昼飯を小町と作っている。
「小町ちゃん、この味でどう？」
「ふむふむ…バッチリです！兄好み！」
リビングで課題を取り込んでいる俺は空腹により、課題を放り投げる。
「めんどい」
数学の問題集をほっぽり投げ、ソファと一体化する。
「先輩！お皿の用意お願いします！」
「あ～はいよ～」
やる気のない声をあげながら立ち上がり、皿とスプーンを出す。
用意をし終わり、ソファに座りながら昼飯の匂いを嗅いでいる。カマクラも同様。匂いを嗅ぎ、エアコンの近くで丸くなる。こいつは毎日暇そうでいいな。さすが猫様ですわ。
「できたよ～！」
小町といろははフライパンをテーブルの上に置く。
それはチャハーンだった。なんでチャハーンって呼んでるのか俺にも分からないが、腹が減ってそれどころじゃない。てか、いろはと小町の飯をダブルで食えるとは俺幸せもんじゃね？まじで生まれて良かったと思える瞬間であった。
あと、総武高に入学して、まぁ1年経ったけど、戸塚に逢えたことが俺の目にハイライトが戻った瞬間である。
逢えた。ここ重要。
とりあえず各自盛り付けをし、合掌。

「「いただきまーす！」」
　1口、口に入れる。
　なんと！美味い！店出せる！（小並感）
　ガツガツとスプーンが止まらない。相当腹が減っていたのかと思えるほどに止まらない。やめられない。これ完全にキマってた。
「味付けとか調味料は私が入れたんですが、美味しそうに食べてくれて嬉しいです！」
「いろはさんめちゃめちゃ料理上手いですよね！」
　俺は食うのに夢中でいろはと小町の会話にあんまりついていけてない。
　とりあえず食う。今の俺を止めることができるのは…いねぇよなぁ？
「先輩にお弁当食べてもらいたくて、料理の勉強してたんだよ～…／／／」
「おっとぉ！いろはさん！いえ、お義姉ちゃん！どうか、こんなごみぃちゃんで宜しければ、今後とも宜しくお願いいたします！」
「もう小町ちゃんってば！まだ…まだ早いよぅ…／／／」
　俺は顔を赤くしながらバクバクと食っている。それだけだ。それだけだもん。いろはが可愛すぎるのを拝めながら食う飯は最高だぜ。
「…先輩？」
「ピク、な、なんだ？」
「さっきからジロジロ見ないでください、恥ずかしいです…／／／」
　やばいくそ可愛いんですけど、え？なに？これが素ですか？まじですか？抱きつきてぇ…
「お、す、すまん…」ポリポリ
「ちょっと2人とも、小町の前でいちゃつかないでよ！」
「あっごめん…」
「わり」
「（イチャついてる事は認めるんだ…このこのお兄ちゃんめ！）」
　飯を食い終わり、俺の部屋に入り浸るいろは。俺は文庫本とにらめっこしている。つまり、集中できないってことだ。

何故なら…
「えへへ～♪先輩に座ってる～♪」
俺は胡座をかき、その上にいろはが乗ってるってイメージだ。想像しとけお前ら、どういう状況か分かるだろ？って誰に語りかけてんだ。
「（すげぇ良い匂い）」クンクン
この匂いでを部屋にばら蒔いたら俺は安眠できる気がする。てか眠くなる。
「（ね、眠い）」ウトウト
……
「あ、あれ？先輩？」
先輩がベッドに寄りかかり、胡座をかいたまま寝ている。これはチャンス？チャンスだよね！悪戯し放題！
「…」
もうカレカノだからいいよね。
「…」チュッ
やっぱり唇を奪うのは…もっとロマンチックにいきたいですね。
「それにしても可愛いなぁ」
この人ほんと、目を瞑っていればイケメンなんですよね～、まぁ起きてる時もかっこいいですけど…
周囲から毛嫌いされている先輩だけど…根はいい人なのに、誰も分かってくれない…
でも…
「もう1人じゃないよですからね？」ナデナデ
いつもぼっちぼっち言ってるけど、もうぼっちじゃないですから…
「ん…いろはぁ……ｚｚｚ」ウシラカラダキー
「…!!」カァ
先輩の顎が私の頭に…
「…私も眠くなってきちゃった、あっそうだ！」
先輩からそっと抜け出す。
そして……

……

「どうしてこうなった」

いろはとベッドで寝てた。

俺、大丈夫だよな？

「とりあえずエアコンついてるし、タオルケットかけるか」

いろはが俺をベットに運んでくれたのだろう。多分胡座をかいていた時だ。道理でちょっと首と背骨が痛いわけだ。

「(こいつの寝顔を見るのは久しぶりだな)」

まじまじといろはの寝顔を覗く。改めて頬を赤くする。同じベッドで一緒に寝ていた。

「(理性保てて良かったわ)」

流石俺のヒッキースキル。

「…」ジーッ

「可愛いな…」ボソ

しかしまぁ、いろはが俺のベッドで寝てると…

俺が夜寝る時意識してしまうやろがい。一色だけに意識ってな。今日は寒いな。夏ですけど…

コーヒーを飲むために階段を下りると、小町が課題とにらめっこしていた。

「分かんねぇぇぇ」

そう言いながらソファで寝ているカマクラに顔を擦り付ける。カマクラは「にゃ」と鳴きながらまた寝る。

俺のときはすぐに逃げるくせに、小町は渡さないからな。

「おう、頑張ってるな」

ようやく俺に気づいたようで、小町は俺を見つめる。

その後、小町はニヤニヤしながら俺に近づき、肩を叩く。

「いろはさんとイチャイチャしてたらいつの間にか寝ちゃってたのかねぇ？」

誰だよお前。俺の知ってる小町じゃねぇだろ。小町を返せ！

「してねぇよ、うん…」

「いろはさんに襲われたのかなぁ？」ニヤニヤ

あながち間違ってはない。と思う。知らんけど、俺の勘違いだったら軽く死ねる。泣きたくなる。
「襲われてねぇよ」
そう答えることしか出来なかった。
高3だけど正直に言えない男の子です。どうもこんにちは。
……
先輩が部屋を出たあと、私は先輩の枕で顔をガードする。なぜかというと先輩に見せる顔がないからです。
先輩が私の事可愛いってあんまり言ってくれないから少し不安だった。でもちゃんと可愛いって言ってくれて嬉しかった。
やっぱり先輩は捻デレでツンデレだった。何それめちゃくちゃエモいですね！顔を赤くして可愛いって言ってくれた時は飛び起きるところでした。
先輩、凄く可愛かったです。
「先輩のベッドで、先輩と一緒に…」
それを考えるだけで思考回路がめちゃくちゃにされちゃう。
今日は先輩とお泊まりしたいな、だめかな。
名残惜しいけど、そろそろ下に降りないと。
これ以上いたら帰りたくなくなる。もう既に帰りたくないけどね♪
あっそうだ！
……
「なんでそんなに溜め込んでんの」
「いやぁ～何でだろうねぇ～」
「総武高に合格したから気が緩んでたのかね？」
「すんません」
「よろしい」
小町の夏休みの課題を手伝う俺まじでいいお兄ちゃんしてる。
ガチャ
「おはようございますぅ～」
ちょっと乱れた服装に寝癖が少し立っている。

やめてね、俺の前でそんな姿を晒さないでね。襲っちゃうぞ☆　すんません。土下座します。許して…ちょっとなんで携帯取り出してるんですか…

「先輩のえっち…／／／」

「馬鹿、ボケナス、八幡」

「おま、だから八幡は悪口じゃねぇだろ、いろはも何喜んでるんだよ」

「へ？なんですか先輩、私が先輩の前でこんな格好してるからって私を襲うつもりだったんですか？ごめんなさい小町ちゃんもいるしシチュエーション的にもうちょっと良い雰囲気になってからお誘いお願いしますごめんなさい」

「いろはさん大胆！お兄ちゃん良かったね！」

「え、あっあぁ」

なんか照れるんですけど…

その後、いろはが急に泊まることになった。そしてまた一緒に寝る事になった。落ち着け、落ち着け理性さん。落ち着けって、頼むから……

翌日

朝、いろはに「先輩のヘタレ」と言われてしまったが、俺に誘う勇気あると思うかって問いただしたい。

「ヒッキー舐めたらあかんで」ドヤ

それだけをいろはに言い、そしてデコピンされる。

あんまり痛くなかった。

そして月日は流れ、もう冬である。

外は凄く寒い。できればコタツムリになりたいくらいだ。もうなってるけど、

ぬくぬくとコタツに入り、古文単語をペラペラ捲る。

もはや国語に関しては俺の知らないものはないので、読書感覚で読んでいた。英単語？えっとまぁぼちぼち。

小町も1年だから余裕もって寝てやがる。去年の小町に悪い事したような罪悪感が今になって痛感している。受験生という事もあり、そんな長くコタツの中に入ることは許されない。部屋に戻り勉強机

にお世話になる時間が増えるだろう。
そろそろ勉強しに行こうとコタツから出ると小町にドヤ顔されてしまった。くそ可愛い。
正直また小さくなりたい。俺は勉強したくない。めんどい。
因みに、模試や過去問では合格ボーダーラインに到達している。滑り止めの大学も余裕でボーダーライン。
できれば総武線で行ける距離が良かったが結局山手線に乗り換えをしなければならない。千葉県から離れたくないが、国公立大学に進学するのは絶対に嫌だ。数学嫌い。川なんとかさんや雪ノ下達は国公立大学に進学予定らしいが、まぁ頑張れって感じだ。
過去問を解き終わったとき、携帯が鳴る。
いろはと付き合ってから結構通話したりメッセージでのやり取りが増えてきた。冬になって少なくなってしまったが、いろはなりに気遣っているのだろう。まじで根はいい子なんだよな。
[先輩！♡　お勉強中に失礼します！クリスマスの日って予定空いてますかぁ？]
クリスマスか、まぁ余裕はあるから時間は余ってるな。本当は外に出たくないが、可愛い彼女の頼みだ。しゃーない。
[空いてるぞ]
っと一言返信する。それから数分後にまた携帯が鳴る。
[お、珍しいですねぇ]
[何がだよ]
[先輩が私のお誘いをすんなりと承諾するの…いつもなら渋々承諾って感じでしたから！]
承諾って、殆ど強制じゃないですか。
今まで承諾した覚えはありません。特に生徒会はな、
俺、脅されて渋々手伝っただけだしな…
[可愛い彼女の為だからな]
画面外でドヤ顔をキメる俺氏。やだ超恥ずい。
[もう！そういうところ本当大好きです！それじゃあ待ち合わせは後ほど！お勉強頑張ってくださいね！]

［おう、サンキューな］
携帯を机の横に置く。
「クリスマスねぇ…」
いつもの俺ならリア充爆発とかほざくところだが、逆に爆発する方になってしまったなぁ。
どうか材木座には会いませんように、あいつには言ってないからな。まぁ家から出ないだろうな…
そして、少しにやけながら過去問を解き続けている。
ん？てかクリスマスって言っても２４と２５どっちなんだ？
慌てながら携帯でメッセージを送る。

クリスマス当日。
「ほらお兄ちゃん、ちゃんと身形整えて！」
「へいへい」
いろはとのクリスマスデート当日。俺はいつもより早めに起きて支度を整える。
一応９時半集合とは言われているが１時間くらい前に着けばいいだろう。速攻で家を飛び出す。
因みに由比ヶ浜達は雪ノ下の家でお泊まり会だそうだ。百合百合してるわな。
「寒すぎだろ！」
外はめちゃくちゃ寒い。結構着込んでる筈なんだが…
駅に着いたらマッ缶買うか、
「んぁ？」
駅に着いた俺、そしていろはが手をはーはーしながらキョロキョロする。
軈て俺の存在に気付くとすぐ駆け寄ってきた。
「せ～んぱい！遅いですぅ！」
一応１時間前に着いたんだが、この子どんだけ楽しみだったの？
ねぇ嬉しいんだけど、八幡的にポイント高い。
「一応１時間前に来たんだがな…それよりいつからいたの」

「３０分くらい前ですね～」
「まじ？流石にそれは悪い事したわ、しょうがねぇからなんか奢るわ」
いろはは少し驚いた表情で俺のおでこを触る。やめて恥ずい。周り見てるんですけど…「リア充幸せになりやがれ爆発しろ」とか「リア充幸せになりやがれください」とかコソコソ聞こえてるんですけど…
ん？なんか思ってたのと違う。
「う～ん、熱はなさそうですね」
「俺をなんだと思ってるの…」
「だって、先輩から奢るって言うの初めてじゃないですかぁ」
確かに、自分から奢るとは言わないな…強制的に奢らされてるけども。
「いやだって、待たせてるのは変わりないだろ？」
「まぁ、私が早く来すぎたので…」
「いいから黙って奢らせろ」
なに今のカッコよすぎる。八幡的ににポイント高い（２回目）
「キュン、素敵ですね！流石私の大好きな彼氏です！いろは的にポイント高いです！」
キュンってそれ口で言うのか、ほんと可愛いなコノヤロウ。ってか小町のポイント制流行ってるのか、すげぇな…俺も使ってるんだけどな。
「今現在どんくらい貯まってるんだ？」
「もうＭＡＸです！」
「おぉ、まじか」

そしてオサレな喫茶店に入る。
「親に金貰ってるから遠慮するなよ、俺の金じゃないし」
親が泣きながら２万円くれたのだ。
「あの、八幡が…」
「中二病の八幡が」
中二病は余計だ。俺は中二病じゃない。材木座と一緒にするな。

いや、しないでくださいお願いします。
「親御さんにどんだけ迷惑かけたんですか…」
「いや、かけてない迷惑かけてないからね、友達できたって言うだけでも泣くからね」
「えぇ…」
どんだけぼっちだったのかよく分かるっと思いながら俺はコーヒーを飲む一方で、いろははあったかい紅茶をちびちび飲む。猫舌なのだろうか。くそ可愛い。
昼は普通に遊んだ。ららぽで映画やゲーセンに行ったり、アクセサリーやお揃いの物を買ったりと、色々とお金を使った。

そして休憩がてら室内のベンチに座る。
「疲れましたぁ～」
「まだイルミネーションまで時間があるな」
「喋りましょうよ～」
「へいへい」
喋ると言っても他愛のない会話をする。
最近何があったか～とか、テストの点数悪かったとか、そんな感じだ。たまに雪ノ下達の事を聞かれるが…まぁ百合百合してるとだけ言っておこう。
「そういえば数学の点数が上がったんですよ！」
「え？何お前天才なの？出来る子なの？よ！天下統一娘！」
数学の点数平均＝最難関大学合格レベルで俺は数学ができない。つまり数学なんて嫌い！お前のせいで俺のメンタルはズタボロだ。
「えっへん！頭を撫でてくれてもいいんですよ！」
「はいよ」ナデナデ
「えへへ～」
今俺の心がぴょんぴょんしてるんじゃよ。
分かるかこの気持ち。
「あっそろそろじゃないですか？」
「お、もうそんな時間か…」

気づけばイルミネーションが始まる時間になっていた。夜の7時半ちょい。
俺といろはは外に出て移動する。
周りにはカップルが大勢いて、ライトアップもされていた。これがクリスマスってやつですね。平塚先生…あんたはすげぇよ。
イルミネーションを少し甘く見ていた。まぁ見た事ないからな。基本クリスマスも家でターキー食って寝てただけだからな。小町にクリスマスプレゼント強請られたけど、小町可愛いならね、仕方ないね。
「せんぱいせんぱい！見てください！猫ですよ猫！」
「ほぇ～めちゃ可愛いし綺麗だな、小町に自慢してやろう」
スマホを取り出し、猫を撮ろうとする。
すると、いろはに腕を掴まれスマホを取られた。
「一緒に撮りましょうよ！」
「い、いいけど小町には送るなよ？」
いやね？付き合ってるのは知られてるけどね？
小町にならまだ見られてもいいけど、親に見られたら恥ずい。恥ずいからね？
「雪乃先輩にも見せつけなきゃ♪」ボソ
「撮るなら早く撮ろうぜ」
「はーい！」
カシャ
その写真は俺とは思えないほど写真写りが良かった。
誰こいつ、まさか俺？あらやだイケメンじゃない、素敵。
「えぇ」
いろはは少しドン引き気味だった。やめてくれ、俺が悪かった。
「まぁ、確かに先輩は最近雰囲気がいいですね。最高です、大好きです結婚してください」
真顔で言われても説得力皆無だ。まぁあざといモードで言われるよりは良いけど。って…何言ってんのこの子。
「そうか？」

「そうです…今のは忘れてくださいね…／／／」
「あっはい…」
こいつの癖が今更だけど分かった気がする。
イルミネーションを全部ゆっくり歩いて見終わった。
猫に犬に色んな動物の形をした綺麗なライトやガラス製の置物が置かれていた。正直に言うと普通に楽しかった。
「綺麗でしたね！」
いろはも満足気にこちらに振り向き、笑顔を見せる。あ～可愛いなこの子。あっ、決して年下大好きってわけではないですはい。つまりロリコンではない。
「そうだな」
内心ウキウキして興奮気味だったが、カッコつけたがりの俺は何気なく返事をする。
俺達の手は今も繋がっており、周りは寒いが手だけは温かいままだった。
「あのベンチで休んでいきましょ！」
「おう」
ここは去年、俺が小さくなって初めてのデートの時に座ったベンチ。
「「先輩が好きなんです！」」
この言葉だけが強く印象的だった。忘れる事の出来ない言葉。初めての告白と言えるだろう。
３人の気持ちがその時に初めて知った。そう、あの時から意識し始めたのだ。今までは近づいてきたから勘違いしそうになったが、あの時から勘違いでは無いことが分かった。自然と理解してしまった。
（先輩は私たちの変化に気づきましたか？）
そうだ。これを聞いて確信したのだ。
雪ノ下達の変化を身をもって実家した。小さくなってなかったら有り得なかった。雪ノ下さんはそれを知った上で行った行動だった

のか、今でも知らない。いや、聞けない。聞けないんだ。
「私が先輩に仮告白した場所ですね」
「あれは正直驚いた」
「まぁそうですよね～、先輩ですもんね～」
「俺をなんだと思ってるんだ」
「うーん…目が腐ってる先輩？」
「驚きました。正直言葉が出ませんでした。だから苛めないでくださいお願いします」
「むふふ～♪」
　驚いた。当たり前だ。驚かないはずがない。今まで俺達の関係は奉仕部ｏｒ俺が生徒会長にしたあざとい後輩という認識だったからだ。
（本物が欲しい）
　いや、違うな。俺にとっての本物は奉仕部も生徒会長も関係なかったのだ。
　友達や恋人？言葉で表現できるほど、俺達の関係は甘くない。
　いろはは察したのか、俺にこう言った。
「先輩にとっての本物…私達が思っていた本物、私達と先輩、似た者同士ですね！」
「あぁ、全くだ」
　俺は無自覚に自然とあいつらと一緒に過ごせる空間が堪らなく好きだったのだろう。雪ノ下との勝負事や会話、仕事関係の関わり、由比ヶ浜のバカっぽいが楽しそうに笑う姿を見たり、ツッコまれたり、いろはの生徒会関係の仕事の手伝い。
　この関係が実は楽しかったのだろう。面倒臭いと思っていたし今も思ってる。それでも俺はあいつらと関わり続けた。
　今の俺がいるのは雪ノ下達のお陰だった。
　戸塚達とも関わって良かった。
　自然と人間関係を広げていたのだ。俺の気付かないうちに…
「うふふ、先輩涙が出てますよ！」
「あっ、これは涙じゃなくてだな、そう雨だ」

「うふふ、何言ってるんですか」
いろははハンカチで俺から流れた涙を拭いてくれた。
「本物が見つかって良かったですね」
そう言いながらハンカチを自分のバッグにしまう。
「あぁ」

そして温まる為にマッ缶を買いに行こうと立ち上がると、突然携帯が鳴った。
由比ヶ浜からだった。
[ヒッキー！今いろはちゃんと一緒？]
[あぁ]
[ちょうど良かった！今ゆきのんの家でクリスマスパーティしてるんだけど、来る？]
俺はいろはに携帯を見せて、尋ねる。
「どうする？」
いろはは少し考えた後、照れながら口を開く。
「本当は先輩にお持ち帰りされたかったけど、まだ心の準備がまだなので行きましょう！」
何この子、まじで可愛いんですけど、くっ…心がぴょんぴょんするんじゃ。
「いつかしてやるよ」ボソッ
「…!!／／／」
わざと聞こえるように言った。「いじわる！」と声が聞こえたが聞こえないふりをしてメッセージを打つ。
[行くわ]
と打ち、いろはの手を握り歩く。マッ缶は帰る時でいいや。
いろははまだ顔を赤くしており、それを拝める俺。
すると、いろはは俺の目の前に立つ。ニヤけた顔で俺に…
「せ～んぱい！大好きです！」チュッ
12月25日、俺はファーストキスをいろはに奪われた。
「ちょ、不意打ちかよ…」ポリポリ

「仕返しですよーだ！」
あざとくない。俺の前ではあざとい自分を見せないいろは。余計に顔を赤くしてしまう。
「次はちゃんとしろよ…」
俺は心に閉まっていた言葉を口に出してしまった。
「はい…次からはちゃんとします…」
いろはは真剣な顔でそう言った。
一瞬真顔だったいろはは再び笑い、
「でも、次は先輩からしてくださいね！私は待ってますから！」
俺は頷く。俺も勇気を出さなきゃな。男の維持ってもんを見せてやる。
「んじゃ、とりあえず行くか、外寒いわ」
「はい！」
俺達は再び手を握り、歩き出す。
俺達の手はとても温かかった。